

文部省検定教科書
財団法人 学校図書研究会編修

小社404
学図

社会科 四年

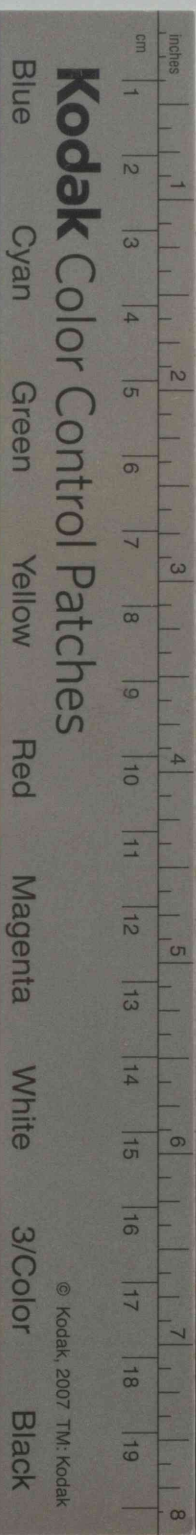
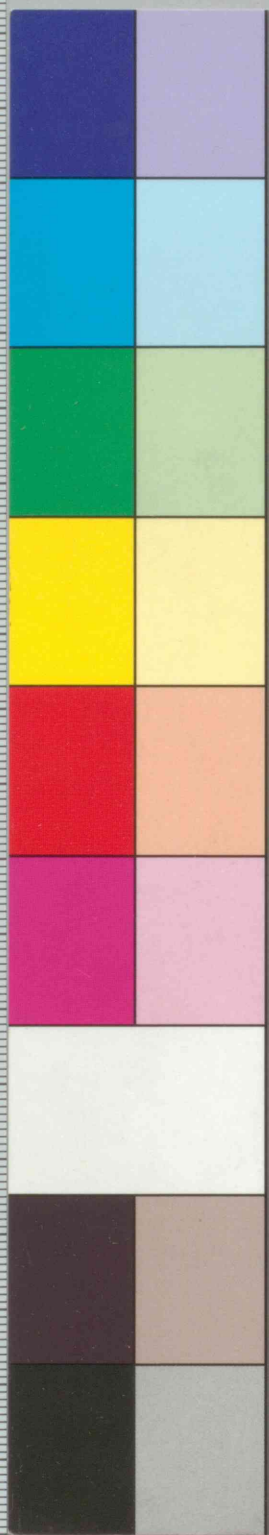
教育學部
資料室

むかしくらし 今くらし



学校図書株式会社

小KD
G16



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

60033

教科書文庫

6
300
34-1950
01304 49976



中央図書館

寄贈

教科書文庫

6

301

34-1950

0130449976

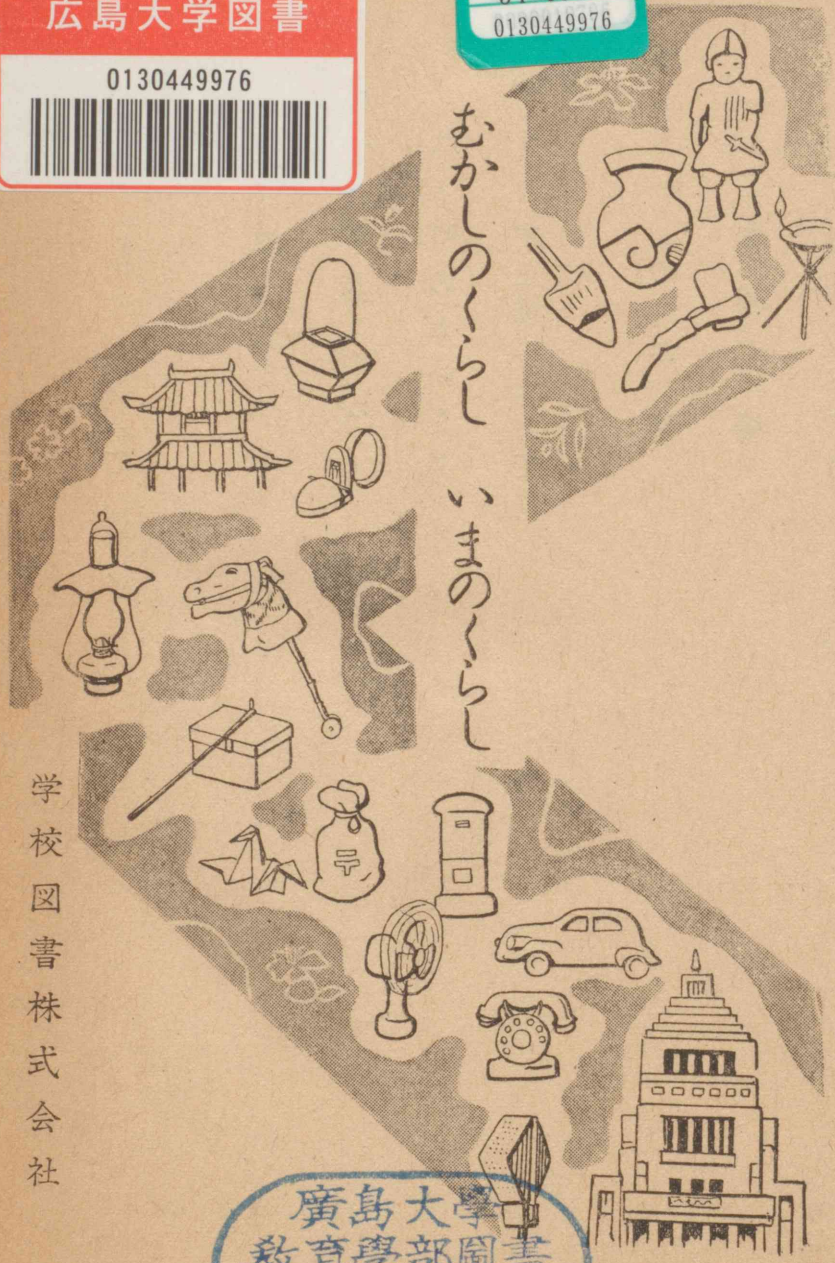
広島大学図書

0130449976



昭和二十五年 月 日
日 文 部 省 検 定 済 小 学 校 社 会 科 用

むかしのくらし
いまのくらし



学校図書株式会社

広島大学
教育学部図書

広島大学図書

0130449976



もくじ

一 町のスケッチ

4

(一) 青葉山から

4

(二) 町のおいたち

10

(三) 波止場はとばに立つて

24

二 町の市場

40

(一) 青物市場

40

(二) 市場のおこり

53

三 汽車にのって

75

(一) まつなみ木の道

75

(二) ゆうびんのはったつ

95

(三) 文字と学校

108

四 村をひらいた人たち

115

(一) 村の記念碑きねんひ

115

(二) あかりのうつりかわり

129

(三) むかしのくらしといまのくらし

141

一 町のスケッチ

(一) 青葉山から

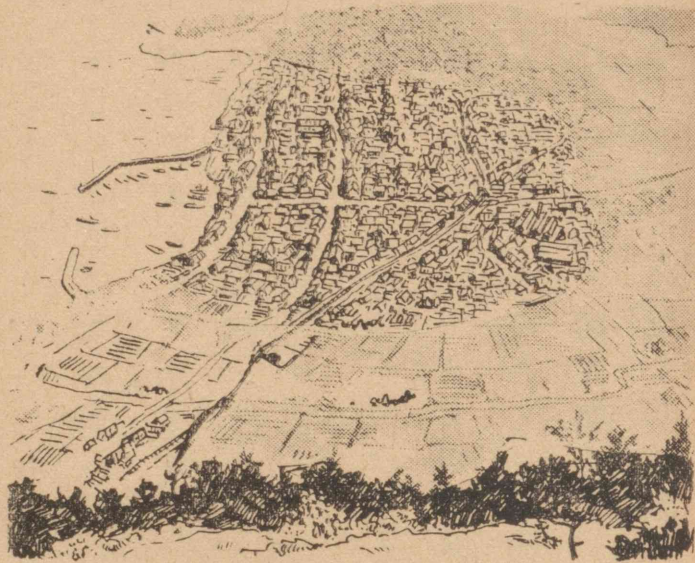
うららかな春の日、一郎くんたちの組では、青葉山にのぼりました。ここにのぼると、朝日市の家なみが、ひと目に見わたされます。この山は、市の東がわにあつて、むかし、城のあつたところですよ。

目の下のたんぼには、みどりの麦や黄色のなたねがひろがり、まいあがつたひばりの声も、のどかに聞こえてきます。遠くの海には、島々がかすんで見えます。

みんなは、見とおしのきく、城あとの石がきの上や、やわらかにのびた草の上で、三人、五人と集まって、町のスケッチにかかりました。

ここにくるまえに、学校で町の地図のかきかたについて、いろいろ話しあいましたが、それは、つぎのようなことでした。

一、山がどのへんにあり、川がどこをながれているか、駅や港は町のどの方角にあるかというように、なにがどこにあるか



を、はつきりかきあらわすこと。

二、山、海、川、道路などのような、めあてになるものから、じゆんじよよくがいていくこと。

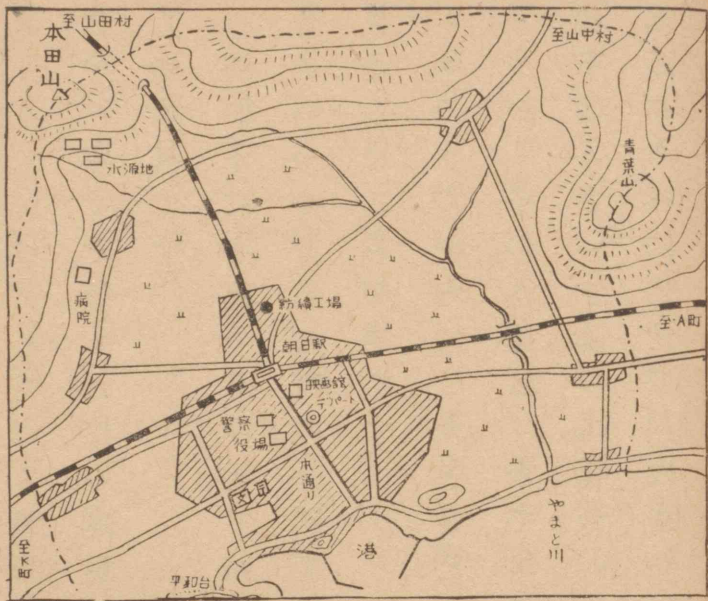
こうしたことにちゆういしながら、みんなは、さかんにスケッチの手を動かしています。

では、一郎くんは、町のようすを聞いてみましょう。

○町の見はらし

いま、この山の下を町に向かつて、走っている汽車があるでしょう。あれは、やまと川の鉄橋をわたって、まもなく朝日駅につくのです。あのたぐさんのかもつ列車やきやく車が、とま

っているところが朝日駅です。駅は、この市の北よりにあつて、市の入口になっています。



この駅からは、海にそつて東西に通ずる鉄道と、山ごしにおくにいく鉄道とが、わかれているので、列車の発着がなかなか多いのです。

駅の前から南の海がんにかけては、たぐさんの家が見えます。

市のまんなかにあたるところが本通りで、ここは、いろいろなしな物を売る店がたくさんあるところです。

あの高いたて物は、この市に一つだけあるデパートです。デ

パートのよこの大きなたて物がえい画館で、その向こうがわに見えるのが市役所と警察署です。すこしはなれたところに、おとうさんがつとめている銀行と、それから、ゆうびん局が見えます。すぐそばに、広い運動場の見えるたて物が、わたくしたちの学校です。

海がんに小高くそびえている山があるでしょう。あれは平和台といって、この町の公園です。海上につきでている防波堤の見えるところが港です。

駅のうらがわに、大きなえんとつと、たて物がたくさん見えますが、そのへんは、市で工場のいちばん多いところですよ。この市は、さいきん、工場がいくつもたてられたので、人口も、五万くらいにふえて、にぎやかになりました。そのなかで、も

つとも大きいのが紡績工場で、そこには千人あまりの工員さんがはたらいているそうです。

この工場にそって右の方を見ると、家はまばらになっていて、たんぼがひらけています。町にくるやさしいは、このへんでつくられるのが多いのです。その小高い山のふもとの美しい赤がわらのたて物は、県立の病院です。

駅のまえから町を通って、西に走っている大きな道路は国道で、となりの町に通じています。駅から北にのびている線路は、本田山のトンネルをぬけて、山田村に出るのです。その本田山のふもとに四角な池が二つ三つ見えますが、あれは、この町のじょう水池です。

(二) 町のおいたち

青葉山から帰った一郎くんたちの組では、地図を中心に、町のようすを話しあいました。この町がさいきんにぎやかになつたのは、なんといつても、紡績工場がたてられたためとかがえられます。そのことについて、先生が、

「では、みなさん。なぜ、朝日市に紡績工場がたつようになつたのでしょう。」

と、たずねられました。上田さんが、

「鉄道が便利なので、材料ざいりょうをはこんだり、そこでつくつたものを、おくり出すことができるからだと思います。」

と、こたえました。すると、山下くんが、

「でも、青葉山の向こうの大石町は、鉄道からはなれているのに、大きな工場があります。」

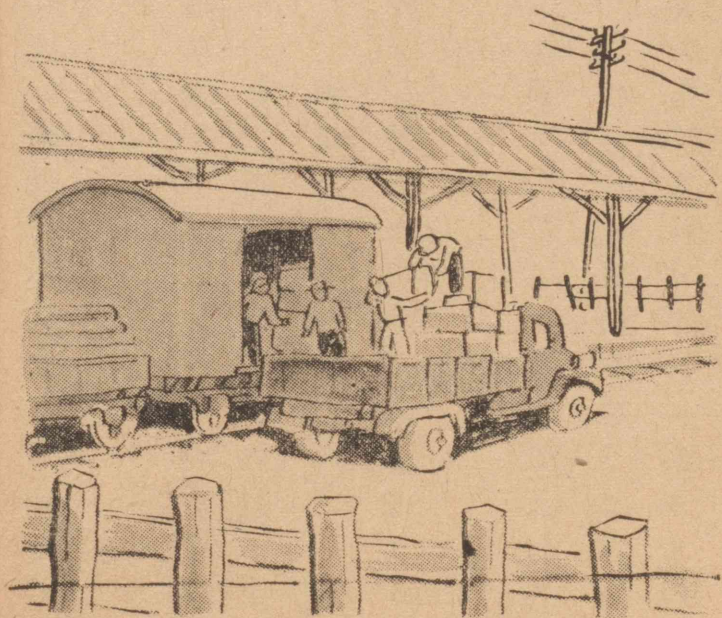
と、いいました。そこで、みんなのあいだに、いろいろいけんがかわされましたが、鉄道がなくても、道路さえよければ、トラックで、にもつがはこべること、朝日市の工場にしても、駅とのいききには、やはり、トラックが使われていることなどが話されました。

「交通が便利でなければ、大きな工場もたてられないことはたしかです。工場と交通とは、ふかいかんけいがあります。しかし、場所によつては、工場がたてられてから、あたりの交通がはつたつして、町がにぎやかになつてくることもあるでしょうね。」

先生は、ここで、ちよつと、ことばをきつて、

「朝日市は、もともと、鉄道が便利なところへ、工場がたてられたのですが、それにしても、なぜ、ここに紡績工場がたつようになったのでしょうか。交通のほかに、もつとたいせつなわけがないでしょうか。」

と、きかれました。みんな、くびをひねりましたが、なかなかいいこたえが出ません。先生は、そこであらためて、



つぎのようにたずねました。

「みなさんは、この朝日市のそばをながれている、きれいなやまと川が、わたくしたちにとって、どんなに役にたっているか、知っているでしようね。」

みんなはくちぐちにこたえました。「田畑に水をひいています。」「本田山のじょう水池にあげてから、町の水道に使っています。」「かみの方にいけば、あゆがとれます。」「水車をうごかしています。」「夏にはおよげます。」

「そう。ずいぶん、いろいろの役にたっていますね。そして、

このやまと川の水が、また、紡績工場のためにも、なくてはならないものなのですよ。だいたい、どんな工場でも、水はおどろくほどたくさんいるもので、そのために、工場は、よく

大きな川ぞいにたてられています。そのうえ、紡績工場となると、とぐべつきれいな水があるので、朝日市の工場などは、きれいなやまと川があつてこそ、はじめて、たてられたといつていいのです。

それから、先生は、むかしこのへんでは、やはり、このやまと川のおかげで、きぬおりのうつくしいそめものが、さかんにつくられていたことを話されました。そして、土地の名物だったそのそめもの話から、朝日市のむかしについて、つぎのようにつづいて話してくださいました。

○城じょう 下か 町まち

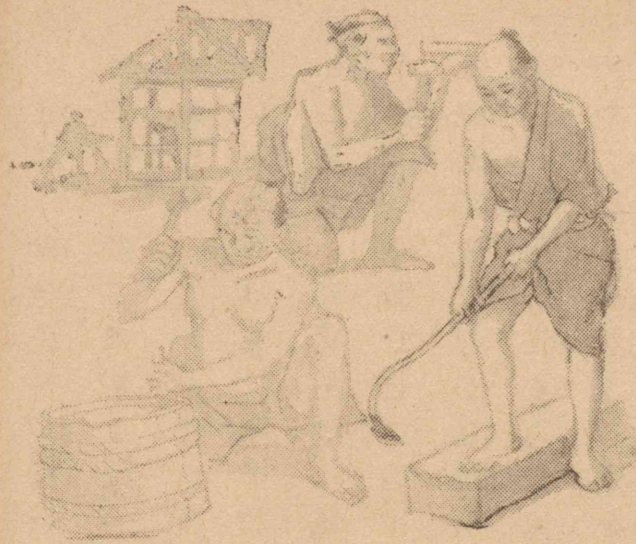
青葉山の城あとは、みんなも知っているとおり、むかしこの地方をおさめていた大名だいみょうのかまえた、朝日城のなごりです。城

は、いまから四百年ぐらいまえにきずかれましたが、城がつくられるまでのこのへんは、さびしいなかでした。田畑もまだわずかしが、たがやされていず、そこに、かぞえるほどの農家がちらばっていたにすぎません。

ところが、青葉山は、城をきずいて、てきをふせぐのに、ちよいどいい地形でしたし、そのふもとの近くを、はしっているいまの国道は、むかしから、だいいな道すじだったので、ここに城がかまえられることになったのです。

そのころの大名は、城をきずくと、そのまわりに、けらいの武士たちを住まわせました。また、やがて、いろいろのしよく人たちをよびよせて、武器ぶきや日用品をつくらせるようになるりしました。そうして人々があつまり住むと、しぜん、ものを売

る店もだんだんできてきます。こんなふうには、城を中心として
はったつしてきた町、それを城下町といいます。いまの日本の
大きな都市は、むかし、そういう城下町だったところが多いの



むかしのしよくにん

ですが、朝日市もその一つです。
朝日市のなかの町の名に、気
をつけてごらん下さい。大工町、
おけや町などというのがありま
す。それは、むかし大名のよび
よせた大工さんやおけやさんを、
そのあたりにまとめて住まわせ
ていたことからおこった名なの
です。また、ごふく町というの

は、ごふくやさんが、のきをならべていた町だったのです。

大名がしよく人たちにつくらせたしなものなかでも、この
土地では、とくに、やまと川を利用したきぬおりのそめものに
力をいれました。いまでは、朝日市のそめものは、すたれてし
まいましたが、むかし大名たちがつくらせたもので、今日も名
物として、各地にのこっているものは、かなりあるのです。瀬
戸ものといえは、いまでは、ひろくやきもの名に使われてい
ますが、それも、もともとは、瀬戸の名産のやきものことで、
その地方の大名が、さかんにつくらせたものでした。

むかしの大名たちは、また、自分の土地をゆたかにするため
に、農家にも田畑のかいこんをすすめました。このへんの田畑
も、そのころから、どんどんひろげられたのです。新田と名の

ついでいるところは、つまり、そのじぶんにはひろげられた、新しい田のことであります。

こうしてむかしをふりかえってみると、このへんのひらけてきたもとといえ、町のにぎわいも、産物も、田畑のかいこんにしても、大名のいきおいによつてゐることがわかります。

けれども、そのころの大名たちは、まず、自分のおさめてゐる地方をゆたかにすることだけをかんがえ、おたがいに、たすけあつて、ひろく世の中ぜんたいを、ゆたかにしようとするまでは、かんがえなかつたし、それだけの力もなかつたのです。また、しよく人に名産のしなをつくらせても、それは大名や武士たちが使うため、いっばんの人々は、使つてはならないといふばあひも、すくなくはありますませんでした。そんなふうには



大名とふつうの人

むかしの大名たちは、めいめいのかつてで、その土地土地のはつたつを、はかつていたといつていいのです。

○新しい都市

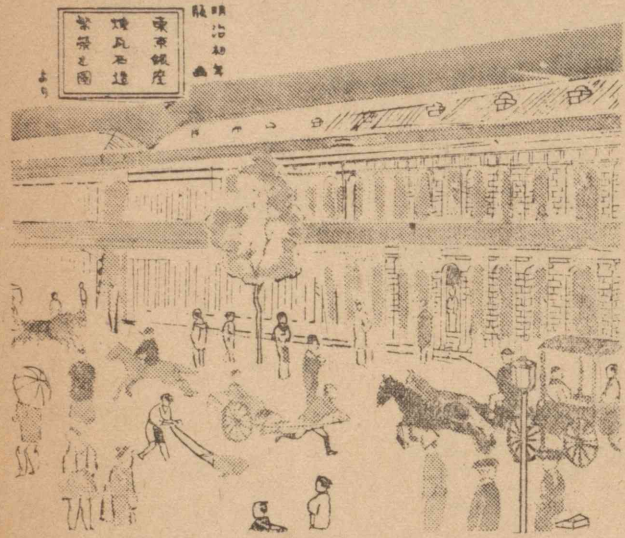
「城下町として、ひらけてきた朝日市が、そののち、いっつそうかつぱつな町に、かわつてきたのは、いつごろ

からだと思ひますか。」

と、先生がみんなにきかれました。田村さんが手をあげて、「うちのおばあさんのお話では、おばあさんが子どもだったこ

ろ、町に鉄道がしかれたり、いろいろの新しいものがつきつきにできてきて、きゆうに、世の中がひらけてきたそうです。ですから、そのころからのことではないでしょうか。」

「そうですね、みなさんのおばあさんが子どもだったころという、だいたい、六・七十年まえでしょう。そのころから、この朝日市ばかりでなく、日本の国ぢゆうが、ほんとに、めきめきとひらけてきました。それというのも、いまからおよそ八十年まえ、地方地方をおさめていた大名というものがなくなり、明治の新しい政府ができ、国ぜんたいをおさめるようになったからです。そして、それまでとめられていた外国との交通がゆるされて、すすんだ文化を、どしどしとり入れ



明治の新ふうけい

ることになりました。朝日市が大名の城下町から、日本の一都市になったのもそのじぶんでした。それから日一日と、便利な都市のすがたとなってきたのですが、さいきん、大きな工場がたてられて、いろいろのしなものをつくる工業都市になってきたのも、ここ八十年ばかりの新しい世の中のおかげといえますね。」

先生は、みんなのかおを見わたしながら、話をつづけられました。

「城下町だったむかしと、いま

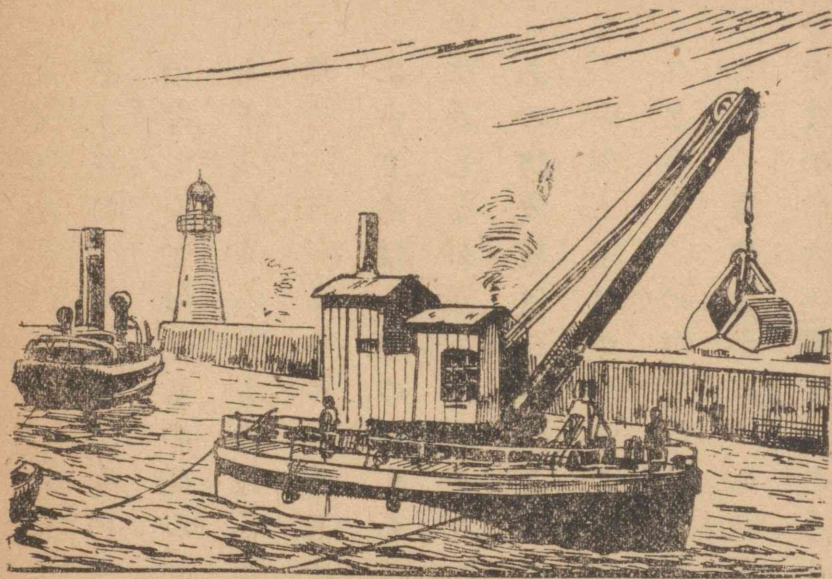


そめものの川ざらし

の朝日市と、そのちがいは、どこにあるでしょう。りっぱなたて物がふえ、交通が便利になり、いろいろの新しい仕事がかつぱつにおこなわれるようになったということだけではありません。ために、むかし、この土地の名物だったきぬおりのそめものと、いまの紡績工場でつくりだされているもめん糸のことをくらべてみましょう。ただ、大名

や武士たちの使うためのきぬおりを、土地の材料でつくっていったのが、むかしの朝日町の仕事だったのです。ところが、今日の朝日市では、外国のわたを材料にして、すばらしく、たくさんなもめん糸をうみ出しています。その糸は、日本の各地で使われているばかりか、海をこえて外国にまで、おくり出されるのです。こうして、日本ぜんたいのため、いや、世界のための仕事をしているのが、いまの朝日市のすがたなのです。

一郎くんたちは、こうした先生のお話を聞いてから、いまの朝日市のようにすを、もつとくわしくしらべるために、町の模型をつくってみることにしました。



防波堤

○港のいまどむかし
がんぺきの上をいききする
人や、出入りするオート三
ん車、トラックなどで、港は
なかなか、かつきづいて見え
ます。
におくりをおえたふたりは、
がんぺきに立って、港をなが
めました。
「いさん、あの波止場の長
さは、どれくらいかしら。」
一郎くんは、波止場をゆび

(三) 波止場に立って

「一郎、いっしょに港までいかないか。」

島のおばさんにおくるにもつを、車につんでいるにいさんが、一郎くんに話しかけました。

「あ、いきましよう。このあいだから、学校でみんなが手わけして、この町のことをしらべているので、港にも、いってみたいと思っていたのです。」

一郎くんは、こういいながら、いさんのところによってきました。

にいさんが車をひき、一郎くんは、あとおしをして、港にいきました。

さしました。

「そうだね。波止場に電とうのはしらがたっているだろう。あのはしらとはしらの間が、十メートルくらいだから、八十メートルくらいなものだろう。それからみると、向こうの防波堤は、百メートルと百五十メートルくらいはあるね。」
にいさんは、港の両がわから、海中につきでている防波堤をゆびさしながらこたえました。

「あの防波堤は、いつごろつくったの。」
と、一郎くんはつぶいてたずねました。

「おとうさんの話では、三十年もまえのことだそうだよ。そのころ、海のなかに、あれだけの防波堤をつくるのだから、なかなかの大工事だったろうね。」

そして、にいさんは、

「このへんは、冬になると西よりの海風が強くなって、海があらるので、船の発着にたいへんこまるのだよ。それで、そと海のあらい波をふせぐために、あの防波堤をつくったのだ。」
と、いいました。

「防波堤のなかったむかしは、ずいぶん、こまったでしょうね。」
「でもね、むかしは、あの平和台のうちがわの、入り海だけが港だったのだから、平和台がしぜん防波堤になっていたのだよ。ところが、だんだん、この町がひらけて大きな工場もできるようになると、あの港だけでは、不便になったので、ここに新しく港がつくられたのだ。」
高等学校にいつているにいさんは、まえに、港についてしら

べたことがあるので、なかなかわしいのです。にいさんは、
「むかしの港といまの港をくらべると、たいへんなちがいだよ。
そうそう、古い船つき場の石がき、まだのこっているから、
あちらにいつてみよう。」

といいながら、さきに立ちました。

海べにそつて、平和台のおかの下にいくと、むかしの船つき
場がありました。

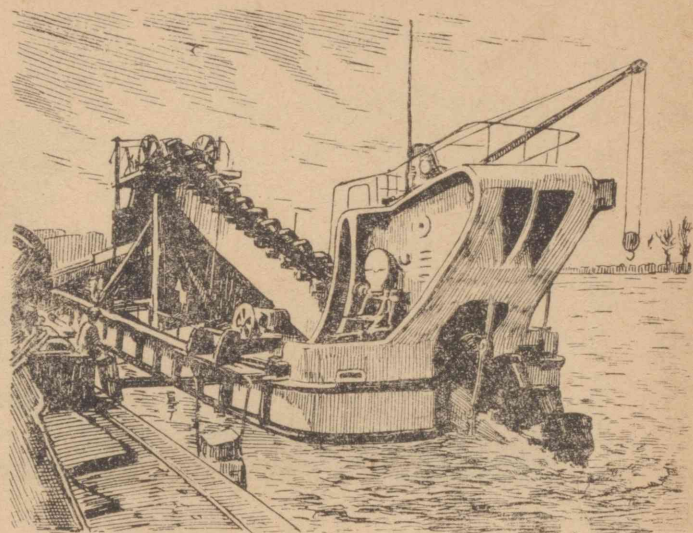
「見てごらん。さっきのがんぺきと防波堤は、コンクリートづ
くりだったが、これは石がきになっているだろう。このふき
んの海岸の石を、あつめてつくつたらしいね。あの防波堤か
らかんがえると、小さな船つき場だなど思うかもしれないが、
いまのように大きな機械を使わずに、これだけつみかさねる



内海の漁港

のは、たいへんな手かずだったろ
う。強い海風や波にもちこたえる
ように石がきのつみ方にもいろい
ろくふうがしてあるそうだ。いま
の鉄てつきんコンクリートなどのじよ
うぶさにくらべては、とてもお話
にならないが、むかしの人の苦心
はいまでもまなびたい気がするね。
みごとにつみかさねられた石がき
を見ながら一郎くんはいました。

「にいさん、がんぺきや防波堤の工事のほか、港には、どん
な仕事があるのですか。」



しゅんせつ船

もつをおさめておく大きな倉庫クラなども、そなえつけねばならぬいな。

「そうだね。海のそこをほる仕

事があるよ。港があさくては、

大きい船がはいれないからね。

ほら、あそこに船べりのひく

い、やぐらのある船がいるだ

ろう。あれがしゅんせつ船と

いって、海のそこをさらえる

船だよ。そのほか、陸上では、

おもいにもつをおろしたり、

あげたりするクレーンや、に

あげたりするクレーンや、に

にいさんは、こういいながら、

波止場のクレーンや倉庫を、ゆび

さしました。

ひとわたり、港の話聞いた一

郎くんは、にいさんといっしょに、

平和台にのぼりました。

○農家のむかし

ここにのぼると、目の下の港か

ら、ずっと、朝日駅につづいてい

るアスファルト道路が、まっすぐ

に見通せます。そのけしきをしばらくながめていた一郎くんは、

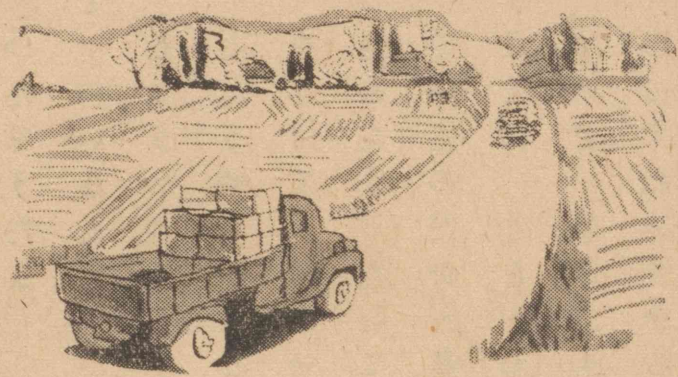
「このあいだ、先生から朝日市のひらけてきたようすを、話し

てもらいましたが、港がこんなになりっぱになったのも、明治からの新しい世の中のおかげでしょう。」
と、いいました。

「そうだね。朝日市が城下町だったころは、このへんは、まだ、数十けんのりょうしの家しかない、小さな漁村だったという話だ。港と朝日の町とのあいだは、田畑ばかりで、魚を売りに町へいくりょうしが、たんぼ道をいききしていたくらいだったそうだよ。」

「それじゃ、町につづくいまの通りもなかったのですね。」

「そう、この道は、五十年ぐらいまえにできたのだ。それから道にそって、だんだん家がたつて、とうとう、町つづきになったのだね。それも、アスファルト道路になって、いまのよ



アスファルト道路

うに家がたくさんたちならんだのは、ついこのごろのことだよ。」

「このへんが、まだ、ほとんど田畑ばかりだったむかしのようすなんて、ぼくたちには、ちよつと思いうかべられませんね。」

アスファルト道路を走っているトラックを目でおいながら、一郎くんがこういうと、にいさんも、むかしのことをかんがえているようでしたが、やがてはるか西の方の、いまでも田畑になっているあたりを、ゆびさして、

「ほら、あそここの林のかげに、一けん、わりに大きなかわらやねが見えるだろう。あれは、むかしの村のしゅうやのあとだったそうだよ。」

と、いいました。

「しゅうやって、なんですか。」

「しゅうやとか、なぬしとかいうのはね、むかし大名のさしずをうけて、村のせわをしたり、農家をとりしまったりしていたのだよ。たいてい、ひろい田地でんちを持った家がらの人がなっていたのだが、農家では、なんでも、大名やしゅうやのいうことに、したがわなければならなかったのだよ。」

「すると、農家でも、大名やしゅうやに、はたらかされていたのですね。先生のお話で、むかしのしよく人が大名たちのた

めに、はたらかされていたことを聞きましたか。」

「そうなのだ。たいていの農家は、いちばん、みじめなくらしをしていたといえるかもしれない。自分の力でつくった米を、ほとんど、大名や田畑をかりている地ぬしに、おさめなければならなかったのだからね。それに、そのころは、農家の人も、しよく人も、身分というものがきまつていて、代々おなじように、おひやくしゅうや、しよく人にしか、なれなかったのだから、ずいぶん、きゆうくつな世の中だったわけさ。」

一郎くんは、そこで、

「そんなきゆうくつなきまりがなくなつて、いまのように、だれでも自分のすきな仕事のできるようになったのは、いつからですか。それも、やっぱり、明治からのことですか。」

と、きいてみました。

「そのとおりでね。明治の新しい政府のなしとげたことで、むかしの身分の区別くべつをなくしたことは、もつとも、大きな仕事だったといえるだろう。ただ、大名のいなくなったのちも、古い地ぬしのいきおいは、ずっと、つづいていたから、身分が自由になっただけでは、農家は、なかなか、らくにはなれなかったのだ。そういう農家のくるしみを、ほんとうに、すくってくれたのが、ついこのごろに、おこなわれた農地かいかくというものだ。つまり、農家が地ぬしから田畑を買いくることができるようになり、自分の田畑を自分の手でたがやしてこそ、おひやくしゅうは、はじめて、ひとりだちの道がひらかれたわけだからね。」

一郎くんも、農地かいかくということばは、耳にしたことがあるけれども、こうして、にいさんの話を聞いて、そのたいせつなことが、わかったのです。

その時、遠くの工場のサイレンが聞こえてきました。

「ああ、もうおひるだ。一郎、帰ろう。」

にいさんにうながされて、一郎くんは平和台をおりました。

学習のてびき

一 きんじよの山にのぼって、みなさんの郷土きょうどの地図をかいてごらんさい。この地図ができたら、郷土の模型をつくってみましょう。この模型の上に、たて物やのり物など、いろいろな工作模型をつくって、のせるのもおもしろいでしょう。

二 みなさんの郷土に工場があったら、どうして、そこにできたかということ、しらべてごらんなさい。

三 きんじよの都会について、城下町からはったつしたものと、そうでないものをくらべて、そのちがいをしらべてみましよう。

四 郷土の名産をしらべて、むかしからあるものと、新しいものに、わけてごらんなさい。

五 みなさんの郷土に港があったら、その港を見学して、はこばれてくる人や物、それに、せつびなどについて、しらべてごらんなさい。

六 士農工商ということばについて、先生やおとうさん、おかあさんに聞いてごらんなさい。

七 先生やおうちの人に聞いて、自分たちの町や村のはってんのようにすをしらべましょう。もとの町や村の写真や絵をあつめましょう。

二 町の市場

(一) 青物市場

朝日市の模型をつくった一郎くんたちの学級では、町のようにすが、だんだんよくわかってきました。つづいて、市場について、しらべることになり、町の人たちが朝夕たべるいろいろな、やさいのある青物市場の見学に行くことにしました。みんなは、見学について、いろいろ話しあったあと、おもに、つぎのようなことを、しらべることになりました。

1 市場には、どんなしなものがあるだろうか。

2 それらのしなものは、どこから、どんなにしてはこぼれてくるのだろうか。

3 市場で人々は、どんなふうし、しなものを手に入れていくだろうか。

こうして、きまめたことがらは、みんなノートに書きとめておきました。

市場では、朝のうちに市がひらかれるので、みんなは、いつもより早く学校に集合しました。初夏の朝は、よく晴れていて、とても、すがすがしい気持です。

市場の近くにくると、なすやきゅうりをつんだオート三りん車が、なん台もなん台も、市場の方に走っていきます。じてん

車に大きなかごをつんだおじさんも、いそがしそうに、ペダルをふんでいます。



青物市場

市場に着くと、入口には、たくさんのリヤカーやオート三りん車が、きちんと、ならんでいます。その向こうには、トラックも、二・三台見えます。先生は、このまえ、たのんておいた、事務所じむしょの川村さんになんらくをするため、市場の中にはいつていきました。しばらくして、先生といっし

よに出てこられた川村さんは、

「やあ、みなさん、いらっしゃい。ちようどいま、市がひらかれているところですから、にぎやかなようすが見られますよ。」と、いわれました。みんなは、すぐ、それぞれのはんにわかれて、中にはいつていきました。一郎くんたちのはんは、井上くんや田村さんたち六人です。

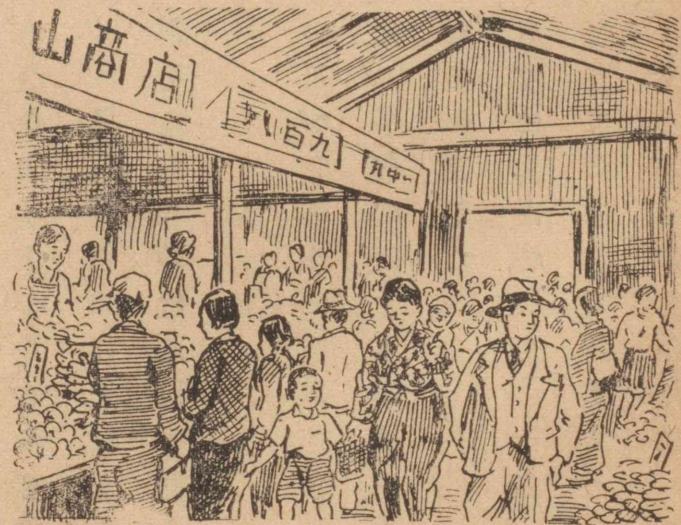
市場では、たくさんの人々が、いそがしそうに、いききしています。通路の両がわの台の上には、春作のはくさいやたまねぎなどが、山のように積みあげられています。

そこでは、いま、市場の人のさしずにしたがつて、十人ぐらいの人たちが、ねだんをいつて、とりきめをしています。

ここで、町のやお屋さんたちは、売る人とのあいだに、めい

めいにねだんをきめて、買いつけるのだそうです。買いつたやお屋さんは、大きなたばのはくさいやたまねぎを、かごに入れて、つぎつぎと、そとにはこび出していきます。

一郎くんたちが、このようすを見ていると、向こうの方から、ガラランガランと、かねの音が聞こえてきました。ふりむくと、たくさんの人々があつまっています。一郎くんたちも、いそいでそのそばにいつてみました。きゆうりやなすを入れたかごが、

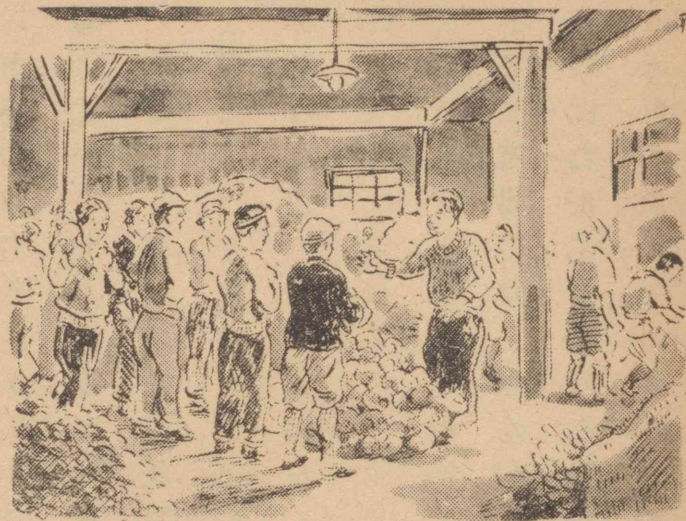


市場の内部

いくつもならんでいます。町では、まだ、あまり見かけないものなので、たずねてみると早づくりのものだということでした。市場のおじさんが、かごをまえにして立つと、ひとりのやお屋さんが、ねだんをいいました。

すると、べつのやお屋さんが、ちよつと高いねだんを、大きな声でつけました。つづいてまた、ほかのやお屋さんがねだんをつけます。口々にねだんをいう声で、あたりはとても、にぎやかです。

こうして、ねだんが高くなって、買い手がなくなるころになると、市場のおじさんが、手をうちます。これで、いちばんしまいにねだんをつけた人が、買いつけることになるのだそうです。それが終ると、また、つぎのかごにうつつていきます。見て



せり売り

いるあいだに、たくさんのきゅうりやなすが、つぎつぎに売られていきます。

ここが終ったころ、また、向こうの方でかねがなりました。

見ると、そこでは、まっかなトマトを売っていましたが、やはり、さつきとおなじようにして売りさばいていました。

一郎くんたちは、ときどき、

ノートに書きこみながら、市場のなかを見まわりました。こうして、見学しているうちに、あれほどたくさんあったやさいは、

ほとんど外にはこび出されてしまいました。

やお屋さんたちは、買いつたやさいを車につんで、いそがしそうに帰っていきます。一郎くんたちは、あのやさいは、いまから一時間もすると、町のやお屋さんの店にならべられるのだらうと思ひながら、見おくりました。

そのとき、ピリピリピリと一郎くんたちの、集合のあいずのふえがなりました。

先生は、みんながあつまるのをまっつて、

「みなさん、いまから、市場について、川村さんにおたずねすることになりました。川村さんは、みなさんのしつもんにと、たえながら、話をしてくださるそうですから——」。

と、いわれました。

川村さんは、にこにこしながら、みんなを見ています。まず、一郎くんが、

「さつき、いそがしそうに、ねだんをつけながらきゆうりやなすを、売っていましたが、いつもあのようにするのですかと、たずねました。」

「そうそう。あの売り方は、町の店の売り方とは、たいへんちがいますね。あれは、せり売りというのです。みなさんが、見ていてもわかるように、ひとりが百円とねだんをつけると、ほかの人が、百二十円というように、だんだんねだんを高くつけるのです。」

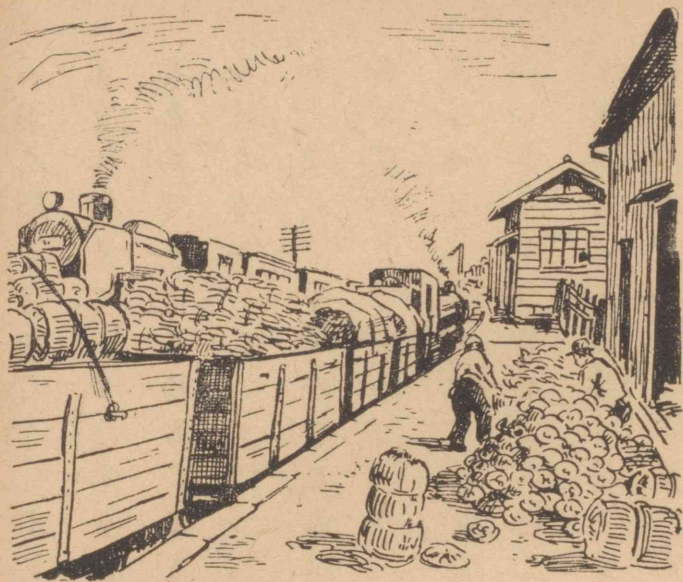
めずらしいやさいがはいつたときや、やさいが少ないときには、どのやお屋さんも、ほしがりますから、ねだんは、ずいぶん高くなっています。でも、しなものがたくさん出るようになると、せり売りをしないで、売る人と買う人が話しあつて、まとめることもあるのです。そんな売り場もあつたでしょう。」

「おじさん、市場のやさいは、このまわりの農家からきているのですか。」

と、こんどは、井上くんがたずねました。

「このごろや、秋のように、やさいがたくさんとれるころは、このふきんの農家からくるのでじゆうぶんですが、やさいの少ない夏や冬になると、ずいぶん遠い南の九州や東の長野県あたりからもくるのですよ。たとえば、かぼちや、ごぼう、それにキヤベツなどですね。」

みんなは、そんな遠い地方からも、やさいが送られているのを聞いて、びっくりしたようです。



そのとき、田村さんが、
「近くからくるやさいは、農家の人たちが、トラックやオート三りん車で、はこんでくるのでしよう。」
と、いいました。

「まあ、そうですね。でも、いまでは、組合がありますから、組合であつめてはこんでくるのが多いのですよ。遠いところ

ろからは、もちろん、かもつ列車でおいってきますね。それに、くだものなどは、島からはこんでくるのも多いのです。ところで、どの地方からくるのも、まえもって、この市場にれんらくがあるのです。やお屋さんたちも、このことをよく知っていて、かねがねちゅういしているのです、仕事も早くはかどるのですよ。

そうそう、ラジオで、どんなものが、どれくらい市場に、はいつたかを知らせているのを、よく聞くでしょう。いまは、こんなにして、すぐ、れんらくがつくので、たいへんべんりになりました。」

すると、先生が、

「この市場に、はいるやさしいの量は、一日にどれくらいですか。」

と、たずねました。

「そうですね。日によって、しゆるいも量もちがっているのはつきりはしませんが、まあ、七八百かん（約三トン）くらいでしょう。もつとも、やさいの出ざかりとか、年のくれなどには、もつともつと、たくさんはいりますがね。とにかく、まあ、この町の台どころにいるだけのやさいは、この市場にはいつてくるわけですよ。」

と、川村さんはこたえました。

それから、なが雨やひでりがつづくど、やさいの入りが少なくて、たいへんこまることなどについての話もありました。

見学が終って、みんなが市場を出るころには、市場の中を、五・六人の人が、きれいにそうじをしていました。

(二) 市場のおこり

青物市場の見学から帰った一郎くんたちは、いろいろ話しあって、図にまとめたり、感想文をつくったりしました。そのあと、ほかの市場についてもしらべました。

こうしてしらべていくうちに、このような市場は、いつごろからおこったのだらうかということが、問題になりました。みんなので、いろいろしらべはじめましたが、なかなか、はつきりしません。

それで、つぎの時間に、先生から話を聞くことにしました。

○ むかしの市

先生は、はじめに、

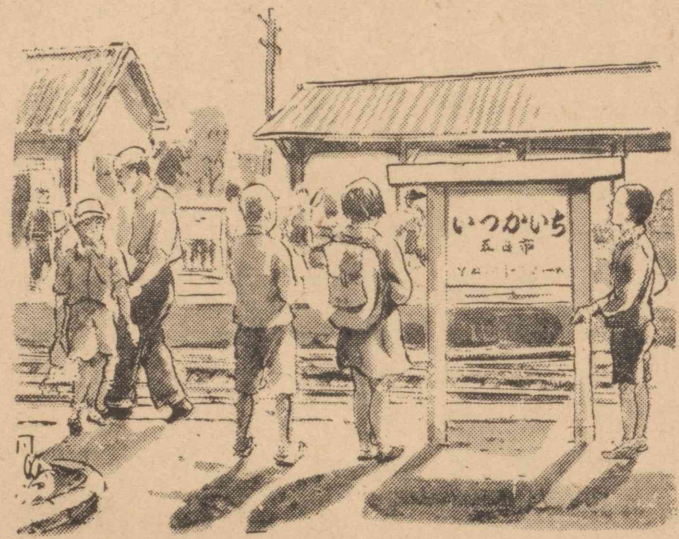
「みなさんは、五日市とか十日市とかいうように、市の名のついた地名を、聞いたことがあるでしょう。なんだか、市場にかんけいがあるように思われますね。」と、みんなを見わたしていわれました。

すると、上田さんが、

「先生、わたしのおじさんは、五日市に住んでいます。ずっとむかし、月の五日の日に市がひらかれていたの、五日市という名がついたということでした。」

と、いいました。先生は、

「そのとおりです。毎月、五日、十五日、二十五日に市がひらかれていたから、五日市という町の名になったわけですね。おなじように、四日市、七日市、八日市などという町がある



とについて話しましょう。」

と、いって、先生は、つぎのように話されました。

し、また二十日市という町なども、ほんとうにあるのですよ。これは、月に一ぺん市をひらいた町でしょうね。」

といいながら、大きな日本地図を出して、いちいちゆびさしました。

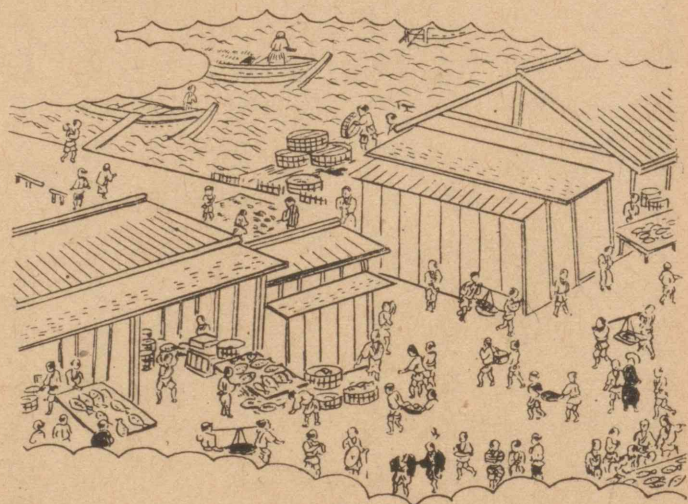
「では、これらの町で、市がさかんにひらかれるようになったのは、いつごろかというこ

「こういう土地で、市がさかんにひらかれるようになったのは、いまから六百年ぐらいまえのようです。

そのころ国内では、かいこをかって、きぬのおり物をつくったり、あさをつくって、あさおりをおったり、また、さらなどのとう器を焼いたり、いろいろな産物が多くなって、国がだんだん、ゆたかになってきました。

こうして、いろいろなしなものがつくられてくると、それまで、たいてい自分たちのいるものは、自分でつくるといいうくらしをしていたときとちがって、おたがいに、つくったものをやりとりした方が、便利になるわけですね。それで、だんだん、めいめいが一しゆるいのしなものだけをつくって、自分のほしいものと、こうかんするといふことが、さかんにな

つてくるわけです。しかし、こうしてしなものをこうかんするにも、人々が自分のほしいものを、いちいちさがしまわっていてはたいへんです。そこでみんなが自分のつくったしなものを、ひとところに持ちよって、おたがいにこうかんするようになりました。それになお、おたがいのつごうをかんがえると、日をさだめておく方がよいので、ある土地では五の日に、あるところでは八の日というように、人々



江戸時代の市場



むかしのそめもの屋

べつに、たくさんのおしなものをならべて、市がひらかれていました。五日市とか八日市とかの町は、こうしてにぎやかに

があつまりました。こうして市場がしたいにはったつしてきたのです。そのうち、その市場にあつまると商人の町をつくるようになりました。このようにして、商人の町ができてからも、やはり、まえとおなじように、さだめられた日には、とく

なつたのですよ。

先生は、ここで、そのころの市場の絵を、みんなに見せてくださいました。

そのとき、一郎くんが、「もつと、むかしには、市場はなかつたのですか。」と、たずねました。

「ずいぶんむかしも、市場は、ひらかれていたのです。それは、奈良に都のあった千二百年もむかしのころです。奈良の都は、たいへん美しい町で、たくさんのおしなものが住んでいました。」



むかしの魚市場

そこに住む人々が、くらしていくためには、たくさんの日用品が
品がいるでしょう。それで、しだいにいろいろなしなものを
売る市が、ひらかれるようになったのです。また、奈良ばかり
りではなく、むかしから、お宮やお寺には、人があつまるの



市 前 門

で、そういうところには、**門前**市といつて、にぎやかな市がたち、また商人の町ができました。いまでも、おまつりやおぼんなど
のときには、店がならびますね。まあ、あれを見ると、むかしの市
のようすも、そうぞうがつくでしょう。

と、先生がここまで話したとき、井上くんが、

「そんなむかしの市では、どんなしなものを、売っていたので
しょうか。」

と、いいました。

「そのころ書かれた書物によると、米、塩、だいず、だいこん、
こんにやく、魚などの食品や、きぬやあさのおり物、それ
に油、紙、むしろ、くぎ、かま、とう器などが、おもなもの
だったようです。」

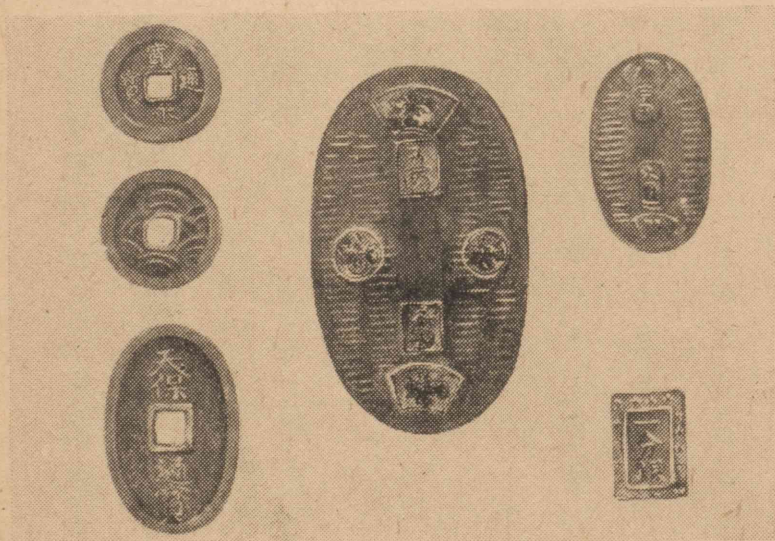
すると、中村さんが、

「そのころ、しなものを売ったり、買ったりするには、やはり、
いまのように、おかねをつかっていたのですか。」
と、たずねました。

○むかしのかへい

「たいへんいいところに気がつきましたね。古くは、おたがい
にいるしなものとしなものを、とりかえるほかなかつたの
です。ところが、いま話した奈良に都があつたころ、はじ
めて、おかねがつくられましたが、世の中に、ひろく使われ
るほどではありませんでした。そのかわり米やおり物のよう
に、だれにでもひつようしなものを、おかねのように使つ
て、とりひきをしていたのです。でも、米とかおり物とかで
物を買うには、持ちはこびが不便ですし、また、自分のほし
いものと、どういうわりあいでもとりかえたらいいかこまるば
あいが多かつたのです。ですから、持ちはこびに便利で、か

ぞえやすいものがひつようになつてきます。こうしておか
ねがかんがえだされたのです。中国では、日本より早くから、
おかねが使われていました。日本でおかねが使われるよう
になつたのは、中国から銅でつくつたおかねが、はいつて
きてからです。そして、いまから四百年ばかりまえになる
と、世の中がひらけて、商業や工業がさかんになつてきま



むかしのかへい



むかしの行商人

あるきました。こういうのが行商人で、とくに名高いのが、

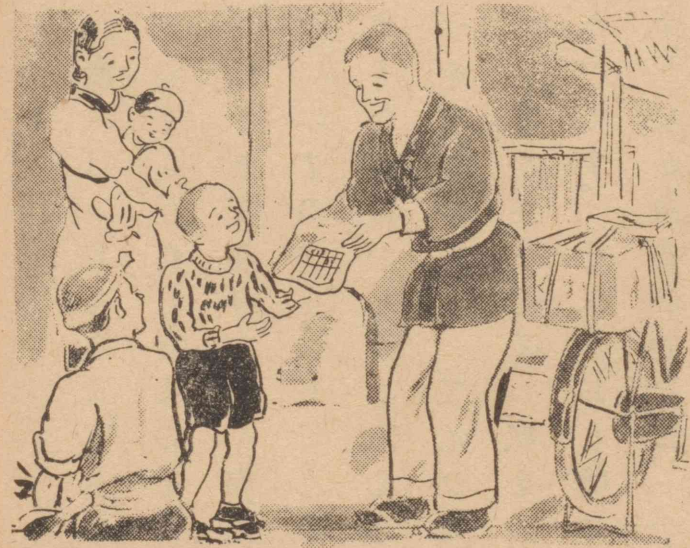
と、いいました。

「そうそう、行商人といってね。行商人は、あちらこちらの土地でつくられたしなものを持って、遠くまで売りあるく商人ですよ。いまのようにじてん車も汽車もないむかしは、みんなにもつをせおったり、てんびんぼうでになったりして、旅をつづけたのです。それでお荷物とかくすりとか魚のひ物など、かくっていたみにくい日用品を売りました。」

○ 行商人

かへいの絵を見ているうちに、井上くんが、
「むかしは、市場でしなものを売っているほかに、しなものを持って方々に売りあるく人があったのではありませんか。」
と、いいました。すると、上田さんが、
「いまでも、いろいろのものを売りあるく人があるわ。」
と、いいました。

おり物やかやを売りあるいた近江商人や、くすりの行商をした富山の商人です。行商人たちは、ほとんど全国の村々にわたって、であるいていたようです。このようなしなものを、自分でたやすくつくることのできない人たちは、村の家を一けん一けんたずねまわる行商人を、たいへんまっていたのです。また、そんな行商人は、しなものを売りあるくだけてなく、世の中のできごとも知らせてくれたのです。と



いまの行商人

いうのは、行商人は、村から村へと旅をつづけるので、いろいろな土地の話を聞いたり、めずらしいできごとを見たりしていたので、世の中のことにあかるかったからです。こんなわけで、村の人たちは、行商人をたいへんかんげいしました。いまでも、地方へいくと、じてん車にしなものをつんださかな屋さんや、ごぶく屋さんたちが、村から村へ売りまわっているのを、よく見かけますね。」

先生はこう話されました。

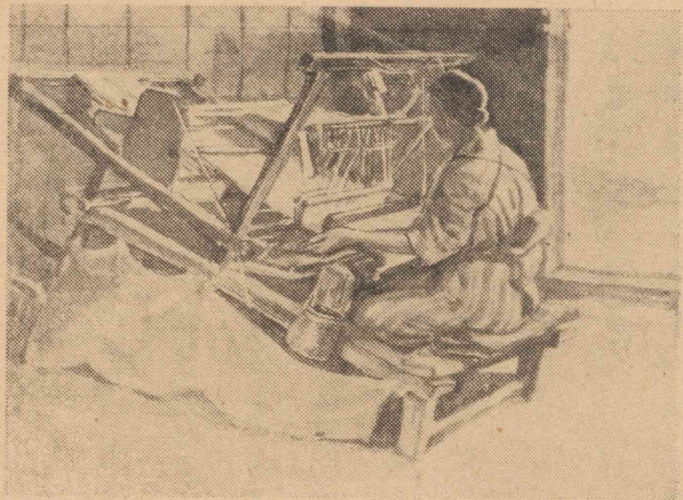
みんなは、むかしの村の人々が、どうしてひつようなしなものを手に入れたか、また、行商人のおかげで、人々が世の中のことを知って、よろこんだことなどを、おもしろく思いながら聞いていました。先生は、さらにお話をつづけられました。

○はたおり

いま話したように、このころの行商人が、売りあるいたおり物は、おもに、あさやきぬで、あとからもめんも出てきました。これらのおり物は、ずいぶんむかしから、つくられてはいたのですが、さかんにつくられるようになったのは、いまから三百年ぐらいまえからのことです。

このようなおり物は、みんな、かんとんな、はたおり機でやったのです。このはたおり機は、つぎの絵のようなかんとんなもので、たくさんはられた、たて糸のあいだに、ひをすべらせて、よこ糸をおりこむのです。

たいていの農家では、このおりはたをそなえつけて、はたおりをしていました。ことにのら仕事の少ない冬のころになると、



むかしふうのはたおり

このはたおり機が、さかんに使われていたので、あちらの家からも、こちらの家からも、おさの音が北風の中にひびいていたことでしょう。

しかし、そのうち、おりものをつくる工場もでき、おりものを売る店も都市にはできました。それでも、つい五・六十年まえまでは日本では、たいていの農家は、自分たちのおり物は、自分の家でおるのがふつうでした。いまでは、おり物は、この市の紡績工場のように大きな工場で、

すすんだ機械をつかつてつくられるので、自分の家でおること
は、ほとんどありません。

○商人の力

この時間のさいごに先生は、もういちど、商人のことについでつぎのように話されて、その日のべんきょうを終りました。

「ずっとむかしのことを考えると、人々は、自分のつくったものを自分でひとのものにとりかえたり、ひとに売ったりしていたのです。けれども、ものをこうかんしたり、売り買いをすることがさかんになるにつれて、ひとのつくったしなものの、とりひきだけをひきうける人が、しぜんにあらわれてきました。それがいうまでもなく商人のはじまりです。そして、おかねがひろく利用されるようになる、商人の中にはだん

だんおかねをもうけて、たくさんのしなものをとりひきで
きるものが出てきました。そうして四百年ぐらいまえから
江戸時代にかけて、商人のかつやくがいよいよさかんにな
ったのです。

商人が、世の中の人々がどんなしなものを、どれくらいほし
がっているかを知るにしたがつて、しよく人にちゆうもん
して、しなものをつくらせたり、農作物などをたくさん買
いにとって、方々に売りさばきました。ですから、そんな商
人のとりひきが、いろいろのしなものを、つくり出させる
力ともなり、また、しなものを遠くひろく、いきわたらせ
る力ともなったのです。江戸時代に、日本の国の産物が、
それまでよりずっとゆたかになったことは、世の中が平和

だったことにもよりますが、たしかに、商人のかつやくによるところが大きかったのです。ただ、江戸時代の商人の仕事は、外国との交通がとめられていたので、日本の国内だけに、かぎられていました。それが明治時代となって、外国とのいききがゆるされてからは商人のかつやくも、世界にひろがってきたわけです。各国の文化をとり入れたことについても、そこに、商人のどりよくがなければ、今日のような日本のはったつは見られなかつたでしょう。そう思ってみると、商人の仕事は、日本の国をゆたかにして、いくうえに、なくてはならない、たいせつなやくめをはたしているわけですね。みなさんの中にも、大きくなって、商人になる人がたくさんあることでしょう。みなさんも、日

本の国をりっぱにするようなよい商人になつてもらいたい
ですね。

学習のてびき

一 みなさんの町のいろいろな市場を見学して、どんなしなものが、どこからどれくらいはいっているかしらべて、これを表にまとめてごらん下さい。

二 「市」ができてから、人々のくらしが、どういうふうにかわってきたでしょう。みなさんでよく話しあつて、けんきゆうしましょう。

三 「市」がさかんにひらかれたころは、いろいろな産物があつて、世の中が、ゆたかになつていたことがわかりますね。そ

のころには、どんなしなものが、つくられていたでしょうか。もつと、くわしくしらべて、話しあってごらんなさい。

四 みなさんのおうちに、古いおかねがあったら、いつできたのか、しらべてごらんなさい。そして、できるだけ、古いおかねを持ちよつて、けんきゆうしましょう。

五 先生やうちの方から、「日本一の商人になる」といった、福沢^{ふくざ}ゆきち先生のことを聞いてごらんなさい。

三 汽車にのつて

(一) まつなみ木の道

山中村の秋まつりに、一郎くんは、おとうさんといっしょに、おじいさんの家へ、いくことになりました。山中村は、おとうさんの生まれた村ですが、仕事にいそがしいおとうさんに、つれていってもらえるのもひさしぶりで、一郎くんは大よろこびです。朝日市からは、汽車で三時間、それからバスで一時間ぐらいかかるところにあります。

土曜日の十二時すぎ、一郎くんたちをのせて、朝日駅をでた



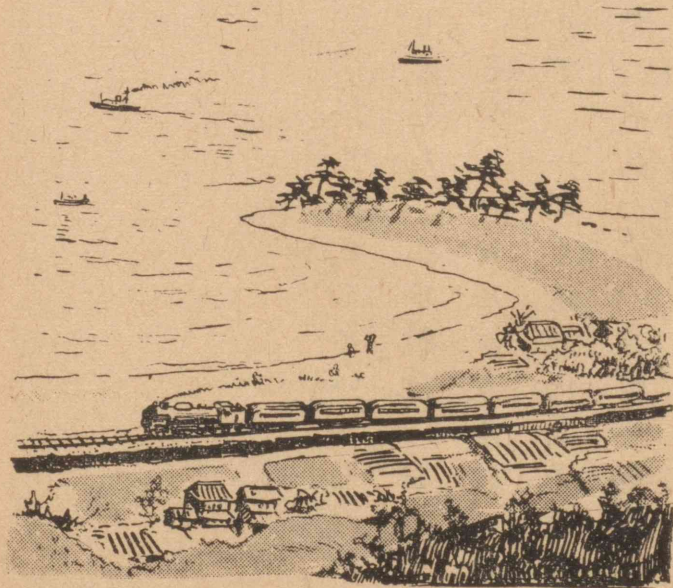
まつなみ木の道

「むかしの街道って——」
 「むかしのおもな道すじのこ
 とだよ。むかしの人は、あ
 の街道を歩いて、遠くまで
 いききしたものだよ。」
 と、おとうさんは、こたえま
 した。
 一郎くんが
 「むかしの人の旅すがたの絵
 なら、いつか学校で見たこ

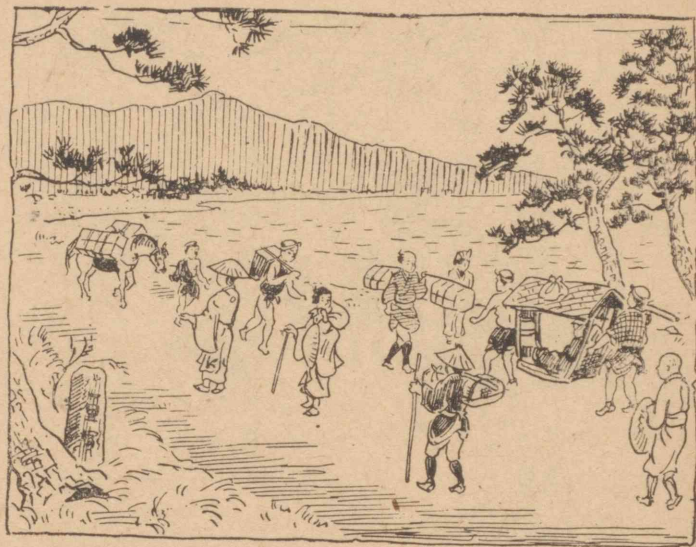
と、いいました。

三百年はたっているだらうね。」

「ああ、あれは、むかしの街道
 だよ。だからあのまつも、二
 おとうさんは、
 一郎くんは、おとうさんを
 ぶりかえっていいました。
 〇むかしの街道
 「おとうさん、あのまつは、ほ
 んとに大きいですね。」
 汽車は、いくつかの駅をすぎて、
 そのうち、汽車のまどから、
 みごとなまつなみ木の道が見え
 てきました。



いま、海岸を走っています。



むかしの旅すがた

とがありますよ。
と、いいました。

「そうかね。かたにもつをぶらさげたり、せおったりして、わらじばきで、てくてく歩いている旅人がよくあるね。そんな旅すがたは、明治のはじめごろまでは、見られたものだそうだ。」

「おとうさんは、日本の道は、

ずっとむかしから、ひらけていたのでしょう。」

一郎くんは、まえに、学習したことを思いだしていいました。

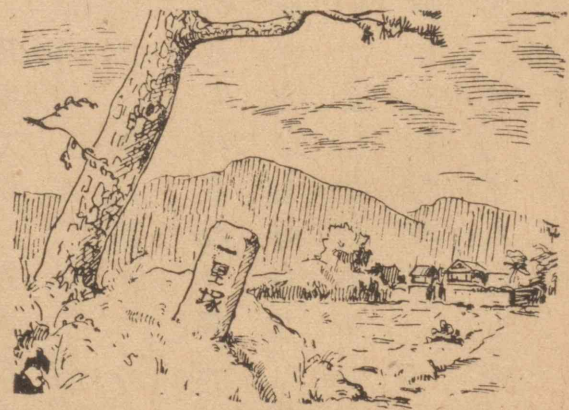
「そうだね。ひらけた村の海岸ぞいなどには、いまから千数百年もまえに、道が通じていたらしいね。そのうち、世の中がすすんでくるにつれて、道も、だんだんたくさんつくられるようになったのだね。それにしても、日本では、道のひらけかたが、おそかったようだよ。」

「どうしておそかったのですか。」

「それには、いろいろなわけが、かんがえられるね。第一、日本は、山や川が多いだろう。その山をきりひらいたり、橋をかけたりするぎじゆつが、なかなかしんぼしなかつたから、道をつけることは、たいへん、むずかしかったのだ。」

おとうさんは、ちよつと、ことばをきつて、また話しつづけました。

「でもね、いまから三百年ぐらいま
えに、徳川氏が江戸（いまの東京）
に、幕府という役所をひらいて、
地方の大名たちを、したがわせて
から、日本全国は、うまくおさま
つてきたのだ。それで江戸は国の
中心になって、江戸から方々に
くおもな道を、ひらいたり、なお
したりしたのだ。いまでも、名ま
えののこっている東海道、奥州街道、
中仙道などがそれなん
だ。そしてそこをとおりる旅人のために、
さつき見たような、
まつなみ木だとか、また、行先や道のり
をおしえる道しるべ、



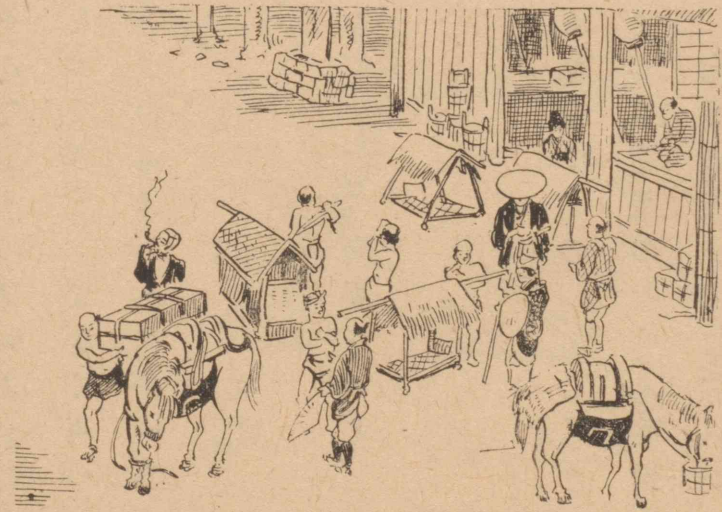
一里づか

一里づかなどもつくったのだね。そんなふう
に道がよくなる
と、旅もそれまでよりは、らくになってきて、
なかでも、江戸と京都をつなぐ東海道などには、
さかんに、人々がいきき
するようになったのだ。」
すると、一郎くんがたずねました。
「そのころは、宿屋はどんなだったのですか。
宿屋だって、もうあつたのでしょう。」

○なんぎな道中

「もちろん、そのころになると、おもな道すじの、
ところどころに、宿場町といつてね、旅人のとまる宿屋の
ならんだ町ができてきたのだ。そういう町には、
宿屋のほかには、旅人が、かごやうまをとりかえら
れるようにした、のりつき場ができ、

また、いろいろな店などもならんで、しだいに、にぎわって
きたわけだね。旅人をとめる宿
屋は、かなりむかしから、少し
はあったようだが、方々に宿場
町のなかったころは、たいてい
の旅人は、お寺やひとの家など
にとめてもらうか、それができ
なければ野原にでもねるよりほ
かはなかったのだ。それだけか
んがえても、むかしの旅がどれ
くらいつらかったかわかるね。
一郎くんも、おとうさんの話に



宿 場

むかしの旅のなんぎを思いながら、
「むかしの人は、旅をするのに、一日にどれくらい歩けたので
しょう。」

と、ききました。

「そうだね。まあ、ふつう一日に六里（二十四キロ）ぐらいか
ね。早い人だと十里（四十キロ）ぐらいは歩いたそうだ。」

「すると江戸から京都まで、なん日ぐらいですか。」
「江戸から京都まで、百二十里（約四百八十キロ）というから、
ふつう二十日は、かかったわけだね。しかし、いそぐときは、
は、とくべつ早いかごやうまを利用したのだ。そのうまだと、
四日ぐらいでいけたそうだよ。」
でも、それには、ずいぶん高いおかねを、はらわなければな



うまにのったむかしの人

『つばめ』で、八時間ぐらいでらくにいけますね。それを思うと、とても、くらべものになりませんね。』

らないし、そのうえ、かごにしてもうまにしても、いまの汽車や電車とちがつて、のりごちもよくないから、どうしても、旅は不便だつたわけだね。ことに、女や子どもでは、それこそ、たいへんだつたらうね。』

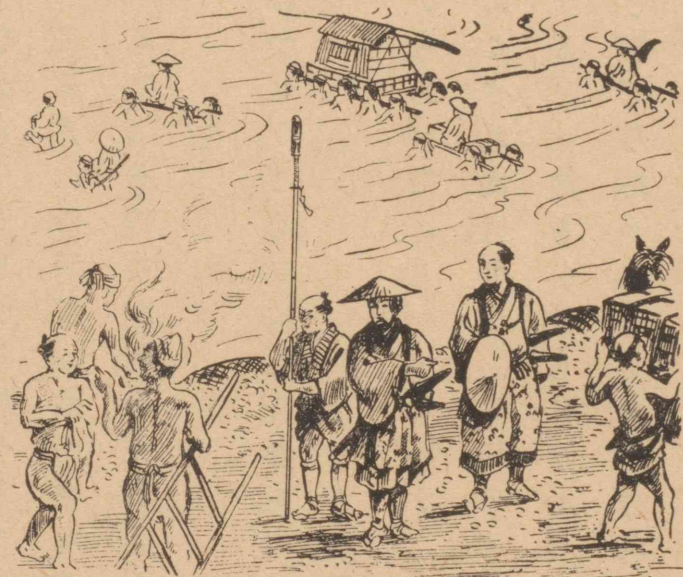
「ほんとにそうですね。いま、東京から京都までは、特急

その時、ごうごうと音をたてながら、汽車が鉄橋をわたりはじめました。目の下には、二・三日まえの雨で、水かさをました川がながれています。一郎くんは、そのながれを見おろしていいいました。

「おとうさん、そんな川は、むかし、どんなにしてわたってたのですか。」

「かんたんな橋なら、むかしからあつたにちがいないが、『箱根八里はうまでもこすがこすにこされぬ大井川』という、うたもあるように、大きな川になると、橋もかけられなかったのだね。そんな川では、わたし船でわたったり、あさければ、歩いてわたったりしたものだよ。大井川は、東海道のなかほどの静岡県にある川だ。いまこそりつばな橋がかけられてい

るが、むかしはながれが早くて、橋はかけられず、わたし船
さえなかつたのだ。そこ
で、川をこす旅人をたす
けるために、このわたし
場にはたくさんの人足が
いて、せおったり、れん
台という台のうえにのせ
たりしてわたしたものだ。
それでも、雨がふって、
川の水がふえると、川ど
めといつて、なん日もな
ん日も、両ぎしの宿場で



大井川のわたし

またねばならなかつたのだ。まあ、この大井川と、さっきの
うたにある箱根山とが、東海道では、いちばん、なんぎなど
ころだつたのだね。

こう聞いて、一郎くんが、

「箱根山は、そんなにけわしかつたのですか。」

と、たずねますと、おとうさんは、

「山坂が多いうえに、大きなすぎの木が、たくさんおいしげつ
ていて、ひるでもくらいほどだつたのだ。そんな歩きにくい
八里の山道を、日のくれないうちに、こえなければならなか
つたのだから、つらかつたわけだね。」

それに、関所せきしよというものもあつたしね。関所せきしよというのは、そ
のころの街道のところどころにおかれていたもので、いきき



関 所

する旅人を、そこでとりし
まっていた役所なのだよ。
そういう関所では、旅人の
もち物や、ゆきさきなどに
ついて、いちいちしらべた
り、ふつうの旅人には、や
つかいなところだった。こ
とに、この箱根山の関所は、
江戸にはいるだいな入口
になっていたので、とくに、
きびしくしらべたのだね。」

と、話しました。

汽車はいつのまにか、K駅ちかくにきていました。

「さあ、つぎの駅でおりるんだよ。」

おとうさんはこういって、一郎くんといっしょに、にもつを
たなからおろしました。

○村のえい画会

おじいさんの家は、山中村でも大きな農家で、おじいさんお
ばあさんをはじめ、一郎くんのおとうさんのおとうとにあたる
おじさんや、その子どものかず子さんやまさおくんたちも住ん
でいます。みんな、ひさしぶりにやってきた一郎くんたちをむ
かえて、おおよろこびで、いろいろと、もてなしてくれました。
そのばん、一郎くんは、かず子さんや、まさおくんと、村の
小学校へ、えい画会を見にいきました。おもしろいまんがと、

『山をこえて』という、文化えい画がありました。文化えい画は、不便な山おくの村々へ、お医者さんがしんさつをしたり、でんせん病のよぼうちゅうしゃをしに、まわっていくありさまをうつしたものでした。そんなお医者さんの山をこえていくすがたを見て、一郎くんは、おとうさんから聞いたばかりの、むかしの旅を見ているような気がしましたが、いまでも、こういう苦心をしているお医者さんのあることを知って、そのどりよくにかんしんしました。

えい画がすんで、一郎くんたちは、秋まつりのたいこの音の聞こえてくる村の道を、おじいさんの家に帰っていきました。

『山をこえて』のことを、一郎くんたちが、かわるがわる話すと、おじいさんが、

「まだ、そんな不便な山おくがあるのかね。だが、この村だつて、つい五・六十年まえまでは、お医者ひとりいなかつたものだ。」

と、そのころのことを思い出すようにいいました。

「お医者さんがひとりもいなかつたら、病氣のときは、どうしたのです。」

と、一郎くんがきくと、

「じつとねているよりしかたがないさ。そうして、やく草をとってきて、せんじぐすりにして、のむくらいだったね。くすりになる草などは、それでも、むかしからのけいけんで、いろいと、くふうをしていたものだよ。」

と、おじいさんは、いまでも、自分でときどきつかつて

いる、げんのしようこという、やく草を見せてくれました。そのとき、おじさんが、一郎くんのおとうさんに、

「このごろは、病気をなおしたり、ふせいだりする方法が、きゆうにはったつして、どれだけ、たすかるかわかりませんね。とくに、でんせん病などは、この村でも、みんながちゆういするようになったから、むかしのようなきけんがなくなつて、なによりしあわせてすよ。それに、さいきん、となりの町に、ほけんじよができて、いつそう、便利になりました。」

と、いいました。おとうさんは、

「それはいいね。とにかく、村もひらけたものだなあ。わたしの小さかったころは、やっと一けんお医者が出てきて、そのお医者さんが、村ではじめてじてん車にのりだしたものだつた。」

そのときは、みんながめずらしがってたいへんだつたよ。

かわつたといえは、お医者さんばかりではないね。秋まつりの夜にえい画会をやるなんて、むかしはゆめにもかんがえられなかつたことだね。これはつい二・三年まえからはじまつたことではないかね。」

と、いいました。おじさんは、

「そうです。こととして三年めになりますね。村の青年がやりはじめたことですが、なかなか、ひょうばんがいいから、これ



バスのかよう農村

からは毎年つづくでしょう。いままでは、おまつりといえは、ただやたらにさわいだり、ごちそうを食べたりしていたものですが、さっきの話のような、いいえい画をやつて、たのしみといつしよに、みんなのためになれば、そんなことから村も、だんだんよくなつていくにちがいありませんね。」

と、いいました。一郎くんたちは、おとうさんたちの話に、じつと、耳をかたむけていました。そばで、おじいさんやおばあさんも、にこにこほおえんで聞いていました。

(二) ゆうびんのはったつ

おじいさんの家から帰つてまもなく、一郎くんは、学校で、はんの友だちといつしよに、ひとつの、問題をしらべてみることにしました。手紙は、むかし、どんなにして、はこんでいたか、というのです。それは、一郎くんが、学校でおとうさんから聞いたむかしの旅の話をしたら、みんなが、それでは、むかしの手紙のはこびかたを、しらべてみようということになったのでした。やがて、みんなのしらべて、つぎのようなことがわかりました。

○ ひきやく

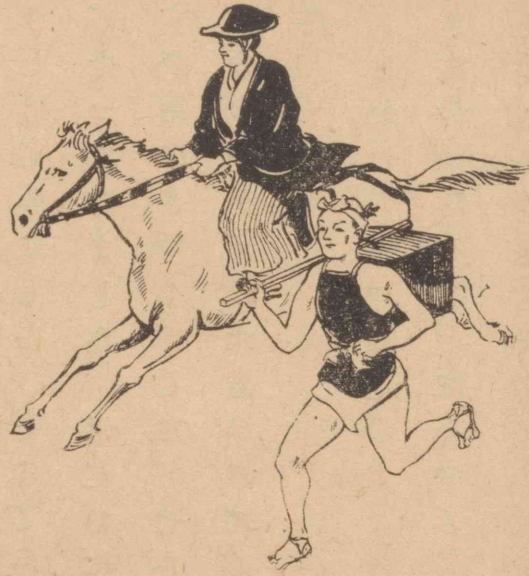
はなれた土地にいる人どうしが、おたがいのようすや、自分

のかんがえを、しらせあう通信は、ずいぶん、むかしから、おこなわれていたのです。

むかしの書物に、千三百年まえに、役所の公用には、手紙などをとどける人夫が、きめられていたことが書いてあるそうです。しかし、そのころは、世の中も、まだまだ不便で、じつさいには、あまり用いられていなかったようです。

そののち、京都を中心にして、世の中がひらけてくると、この都と地方とのあいだのれんらくを、するひつようが多くなってきました。それで、人のいききとともに、手紙をおくったり、しなものをとどけたりすることも、しだいに、さかんになりました。

いまから七百年ぐらいまえになると、国内のいききや通信は、



早うまとひきやく

いよいよ、しきりにおこなわれてきました。そこで、手紙やにもつをはこぶのをせんもんにする人がひつようとなり、ようやく「ひきやく」といわれる人々がでてきたのです。

しかし、そのころの道路は、よくととのわず、旅もなんぎだったので、ひきやくは、うまにのつていくのが多かったようです。ことに、いそぐときには、とちゆうでなんともうまをのりついで走りました。これを早うまといっていました。

江戸時代になって、世の中が、よくおさまってくると、いろ

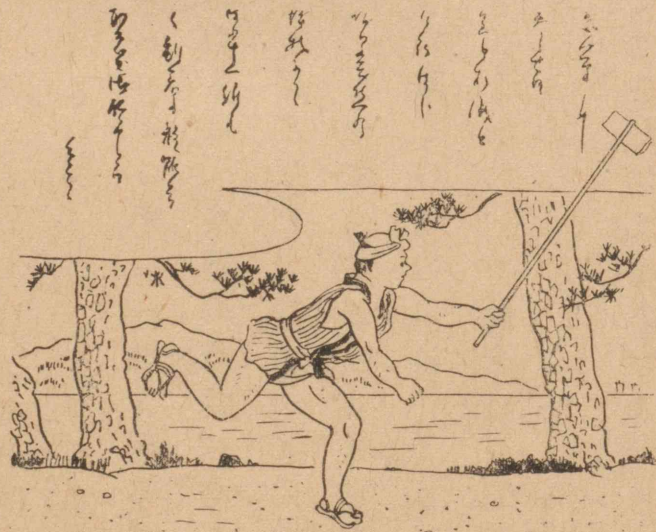
いろの産業がはったつし、しなものの売り買いがさかんになつて、とくに、江戸や大阪おおさかを中心とするとりひきが、かつぱつになりました。そうになると、通信は、ますますたいせつなものになり、さまざまのひきやくが、つぎつぎに、おもな街道をいききはじめました。そのころのひきやくはたいていわらじがけで走っていました。はじめにつくられたのは、幕府の用事をたす公用ひきやくでした。また、各地の大名たちも、それぞれ、自分のかかえの大名ひきやくというものをもつことができました。

しかし、いっばんの人々は、こんなひきやくを使うことができなかった。旅をする人にも、たのむほかはなかつたのです。しかし、そのうちに大きな商人たちは、自分たちの通信

のために、江戸と大阪のあいだに月に三ど、日をきめてひきやくを走らせることを、幕府からゆるされました。それを町びきやくとよみました。

大阪で手紙をうけとつたひきやくは、東海道をなんかいも、なかつぎしながら、ふつう六日ぐらいで江戸についたといえます。江戸につくと、

はこんできた手紙を、ひきやく屋のまえにならべて、受取人をまつたのだそうです。このような町びきやくのすがたは、やが



早 状

て、ほかのおもな街道にも、見られるようになりました。ひきやくは、こうして明治のはじめまで、各地の街道を走ったのです。

○いまの通信

明治四年、すすんだ外国にならつて、新しいゆうびんのしくみがとり入れられました。それから、交通の進歩にもたすけられて、ゆうびんは、見ちがえるほど便利となり、どんな遠いところにも、手紙やにもつが、たやすくどくようになりました。とくに、さいきんでは、外国との通信には、こうゆうゆうびんができて、あのはやいひこうきに、手紙をはこんでもらえるまでになったのです。

手紙のやりとりが、便利になっただけではありません。ここ

七十年ほどの間に、電気力をかりて、いそぎの電ぼうをうったり、遠くはなれた人と電話で、じかに話しあえるようになってきたことは、いうまでもありません。こうした新しいいろいろの通信を利用して、日々をおくっている、このごろのわたしたちからみると、やつと、ひきやくを使って手紙をやりとりしていた、むかしの人々のくらしは、どんなに不便だったことでしょう。いや、不便だったというよりも、むかしの人々は、おたがいに遠くのようにすを、あまり知りあうことなしに、近くの人々だけのせまい世の中にくらしていたといえるでしょう。

通信といえば、手紙や電話で、たがいに、しらせあうことばかりでなく、ひろく、世の中のさまざまのことを、人々に知らせることもそうです。このごろの新聞やラジオのはたらきも、

やはり通信です。わたしたちは、新聞やラジオによって、世界のできごとを、ひろく、すばやく、しらされています。そして、こうした通信のすばらしいはったつが、今日では、世界中の人々の心と心をつなぎあわせ、大きな仕事に力を、あつめさせることにもなっているわけなのです。

(三) 文字と学校

ゆうびんについて、いろいろしらべているうちに、むかしの手紙に書かれた文字が、いまの文字とは、だいぶちがっていることに気がつきました。それで、文字のなりたちについても、べんきょうしてみましたが、だいたい、つぎのようなことがしらべられました。

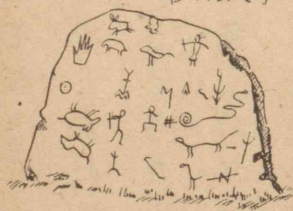
○文字の話

わたしたちは、自分のかんがえを人につたえるのに、ことばやみぶりなどを使います。でも、そこにいない人や、遠くはなれている人にしらせようと思うと、なにか、べつのあらわし方がひつようです。そのため、人々は、むかしからいろいろと、

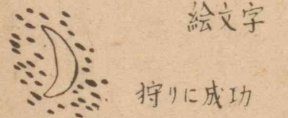
ちがえることが多かったようです。入々は、こうして絵でしらせあっているうちに、この絵をだんだんかんたんにして、絵文字をつくりはじめました。これが文字のはじまりだといわれています。

いまから五・六千年ぐらいまえに、アフリカのエジプトには、そうした絵文字があったという事ですし、また中国でも、この絵文字が、さいしよにつくられたようです。

メキシコ原住民の
岩の絵文字



アメリカインディアンの
絵文字



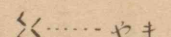
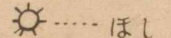
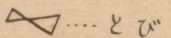
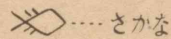
星がふる



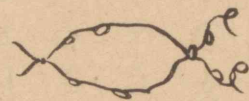
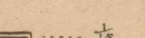
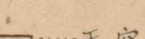
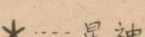
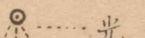
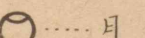
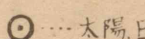
狩りに成功

絵文字

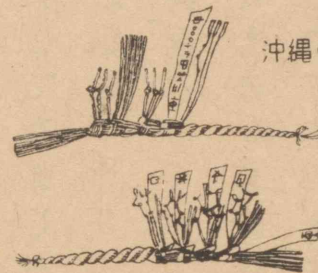
メソポタミアの
絵文字



エジプトの
絵文字



台湾のけつじょう文字



沖縄のなわの文字

けつじょう

これらのあらわし方とともに、また人々は、けものや魚などの形を絵に書き、それをくみあわせて、自分のかんがえを、わからせる方法をかんがえました。しかし、これもなかなかむずかしいことで、なかにはまちがって読んだり、いみをと

くふうしてきました。大むかしには、なわのむすび方で、いろいろなかんがえをあらわすことを、くふうした人々もあります。また木の皮や、あさなわをあんたり、色のちがった貝や、じゆずだまを、むすんだりしてみた人々もあります。

ところで、中国でつくられた絵文字は、ながいあいだ、使われていたうちに、だんだん形がととのえられて、文字らしいもの

かんじのおこり 日月川上下

かんじのおこり

○ 月 川 上 下

のようになってきました。そののち世の中もすすみ、新しいことばが、ふえるにしましたが、新しい文字が、つぎつぎに、かんがえだされるようになりました。そしていま見るような漢字ができたのです。

こうして、できた漢字が、日本につたえられたのは、いまから千七百年ほどまえのことです。それまで文字のなかつた日本では、この漢字をとりいれて、ねっしんにまなびました。なにしろ、はじめて文字をまなぶのですから、どれほど苦心したかわかりません。

こうした苦心によって、いままで、ただ口から口へつたえていただけだったかんがえを、文字で書きのこすことができるようになったのです。しかし、この漢字で、日本のことばを書きあらわすことはたいへんむずかしいことでした。それで、むかしの人々は、その漢字から、日本のことばを、あらわすのに便利なひらがなや、かたかなをつくりだしました。

ひらがなは、たとえば「波」からは「は」、「計」からは「け」、「不」からは「ふ」というように、漢字のぜんたいを、くずしたものからつくりだしたのです。また、かたかなは、漢字のいちぶをとったもので、たとえば「伊」から「イ」、加から「カ」などと、書くようになったのです。

こうしたかな文字は、漢字にくらべて、かすが少なく、おぼえるのにも、たいそう便利なので、その利用は、きゆうにさかんになってきました。こうして、かな文字がひろまると、自分のかんがえを、たやすく書きあらわすことができようになつたのです。そのため手紙はもちろん、本を読んだり、書いたりする人が、だんだん多くなり、ひろく知しきが国中にいきわたつて、世の中の進歩をうながしてきたのです。

○学校てんらん会

文字のなりたちをしらべたついでに、一郎くんたちのクラスでは、『日本の学校のむかしといま』という、てんらん会をひらくけいかくをたてました。そのために、みんなは、つぎのような手わけをきめました。

- 1 むかしの教科書、そろばん、ちようめんなど、学校で使つた古いものを、いろいろとさがしてくることに。
- 2 学校の歴史について書いた本を、できるだけたくさんあつめることに。

- 3 寺子屋のようすや、明治時代の学校のようすを、大きく絵に書くことに。

- 4 むかしの学校で、おしえていた学科のことや、いまの学校のしゆるいなど、わかりやすく表にしてみることに。

- 5 外国の学校のしやしんなどもさがしてくることに。
だいたい、こんなよていをたてて、各はんにわかれて、じゆんびをすすめました。みんなが、いっしょうけんめいどりよくしたかひがあつて、思いのほかめずらしいものが、方々の家か

らかりてこられ、絵や図表もそれぞれきれいに書きあげられて
いきました。

てんらん会は、二学期のすえに、一郎くんたちの教室でひら
かれました。クラスのじまんになったほど、りっぱなちんれつ
ができて、見にこられたおとうさんやおかあさんたちも、口を
そろえて、かんしんしたのでした。

一郎くんたちは、じゅんびをしているうちから、日本の学校
のようすについて、いろいろのことが、しぜんにのみこめてき
ました。学校の歴史も、やはり、この七・八十年の間に、きゅ
うに、はったつしてきたことが、よくわかりました。

古くは千年以上もまえから、学問をおしえるところはあった
のです。けれども、それらは、みな身分の高い人々の子どもや、

ぼうさんなどがべんきようする、
とくべつの学校でした。江戸時代
には、とくに、中国の学問をおし
える学校が方々にできましたが、
それも、大名や武士たちのため
にたてられたものだったので、そ
して、いっばんの人々は、ろくに
字も読めないものが多くて、わす
かにお寺などでぼうさんやお医者
から手習いや、そろばんをおしえてもらう子どもがあつたくら
いでした。きんじよの子どもがあつまつて、そんなふうには、べ
んきようしたところを寺子屋といいました。



寺子屋

ところが、明治時代になって、一郎くんが、いつかにいさんにおしえてもらったように、人々の身分の区別がなくなるともに、はじめて、すべての子どもは、いっしょに小学校が、日本全国にたてられました。こんどは、どんな子どもでも、小学校へかよわなければいけないことになったのです。そして、人々はだれでも、読み書きができるようになり、めいめいが自分のすきな仕事に、はげむ知しきを身につけることになりました。

ことに、このごろでは、男も女もみんな中学校まで、かならず、かよえるようになり、さまざま、その上の学校も、どこのつてきて、人々は自由におのののぞむべんきようが、できる世の中となりました。こうして、学校のはったつしたこのごろでこそ、いろいろの学問がすすみ、日本の国の文化は、ほ

んとくに、高められていくにちがいありません。

一郎くんは、教室のかべにはられた、わずか五・六人の子どもが、そろばんをならっている寺子屋の絵をながめながら、いま、自分のかよっている、この学校に、あらためて、ちゅういしてみました。すると、校庭から聞こえてくる、おおぜいの生徒の声も、みんなが自由に学べる新しい世の中を、うたっているように思われるのでした。

学習のてびき

一 みなさんの村や町にも、むかしの道路が見られるでしょう。このごろの道路と、いまの道路とくらべて、橋、一里づかなどのせつびや、人のいききなどが、どんなにかわっているか、

しらべらてごんなさい。

二 陸の上の旅をかんがえただけでも、八十年まえといまとではずいぶん、かわっています。では、海の上や空のいききは、どうかわっているでしょうか。こんなことについても、いろいろしらべて、話しあつてごらんなさい。

三 わたしたちの国の通信は、明治の時代になつてから、きゆうにひらけてきましたね。それはどうしてでしょうか。

四 文字のしゆるいをしらべて、それぞれの便利なところや、不便なところをけんきゆうしましょう。

五 おとしよりの方たちから、その方たちのはいった学校のよすを、くわしく聞きましよう。

四 村をひらいた人たち

(一) 村の記念碑

この冬休みには、ぜひ、ぼくの家遊びに来て下さい。待っています。——と、一郎くんが手紙を出したので、休みになると、すぐ、かず子さんとまさおくんが、朝日市にやってきました。そのあくる日は、冬にはめずらしく、あたたかな、いい天気だったので、一郎くんのいさんもいっしょに、山の向こうの平野村あたりまでピクニックに出かけることになりました。

「やっぱり、冬のピクニックは、少しさむいね。」
と、にいきさんがいうと、かず子さんは、

「でも、このへんは、山中村にくらべると、ずっと、あたたか
ですね。それに、こんないいお天気ですもの。歩いていけば、
きつと、ぽかぽかするくらいでしょう。」

と、いいました。

みんなは、元気に山をこえていきました。ほんとに、いい天
気で、ながめはすばらしいし、のぼり道では、うつすら、あせ
ばむくらいでした。

やがて、平野村の見える南むきの坂の上までくると、そのへ
んは、いちめんのみかん畑で、おいしそうなみかんが、すずな
りにみのつていました。

「きれいだなあ。」

と、まさおくんが、思わず大声をあげました。

「このみかんは、あじもすばらしいのだよ。」

にいきさんは、そういつて、あたたかな気候と南むきの水はけ
のいいがけが、みかんをつくるのに、つごうのいいことを話し
てくれました。

かず子さんが、

「そんなに遠くはなれてもないのに、ここと山中村とでは、
ずいぶんちがいますね。山中村はさむくて、みかんなどもな
らないし、つまらないわ。」

と、いいました。

「そのかわり、山中村には、くりの木が多いし、どうもろこし

なんか、たくさん食べられるからいいでしょう。」
と、一郎くんがいました。すると、にいさんが、

「土地土地で、地形や気候にあう産物がとれるのはおもしろいね。そういう土地のせいしつをうまく利用して、みんなが力をあわせて、ものをつくりだせば、それだけ土地がゆたかになつてくるわけだ。ここのみかんだって、こんなにさかんなつたのは、ついこのごろのことだそうだよ。あまみの多いみかんをならせるように、ずいぶん苦心しているらしいね。」
と、話しました。

おひるになつたので、四人は、みかん畑の近くで、おべんとうを食べました。そして、ひと休みしてから、平野村の方におりていきました。みかん畑をすぎて、村が目の下に見える小高

いおかにくると、そこに、大きな記念碑がたっていました。

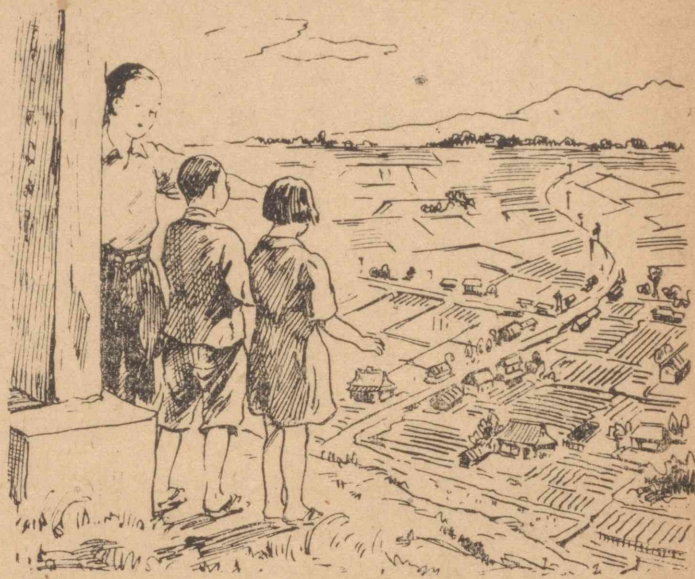
○耕地整理

「にいさん、この記念碑には、どんなことが書いてありますか。」
一郎くんは、記念碑のそばに、よりながらききました。

「これは、平野村の耕地整理を記念して、たてたものだよ。明治四十年と書いてあるから、いまから四十年あまりもまえのことだね。ここにたくさん、人の名が書いてあるだろう。そのとき、ほねおった人たちなのだよ。ほら、あの大田のおじいさんの名が、いちばんはじめに書いてあるよ。」

にいさんは、こういって、記念碑の文字をゆびさしました。そして、

「この下に見えるのが、そのとき、整理されたたんぼなのだよ。」



記念碑

きちんとならんでいるだろ。
う。

と、いいました。

「耕地整理というのは、あんなふう
に整理することな
です。どうして、あんな
にするのですか。」

一郎くんは、きちんと、と
のえられたたんぼを見わた
しながらたずねました。

「むかし、めいめいが、かつてにつくったたんぼは、形がまち
まちで、あぜばかり多かったのだ。そんなむだの多いたんぼ

では、いねをうえつけるめんせきはせまいし、ひりょうをは
こぶのにも不便で、仕事が、はかどらなかつたのだね。それ
を整理して、いまのようにきちんとしたわけだ。それからは、
ぐつと、米のとれ高もふえたという話だよ。」

と、にいさんはいいました。

「では、耕地整理を方々でやれば、それだけ、日本ではたくさ
んの米がとれるようになるわけですね。」

一郎くんが、また、たずねました。

「そうそう。でも、この工事は、どこでも、かんたんにはやれる
というわけにはいかないのだ。形をきちんとするだけでも、
かなりの大仕事のうえに、用水路をうまくおすのが、なか
なかむずかしいからね。それに、水がかりのあるところな

ども、うっかり手をつけると水がひけず、いねがそだたなくなるしんぱいがあるのだ。」



心をあわせてはたらく人々

にいさんがこういうと、かず子さんが、

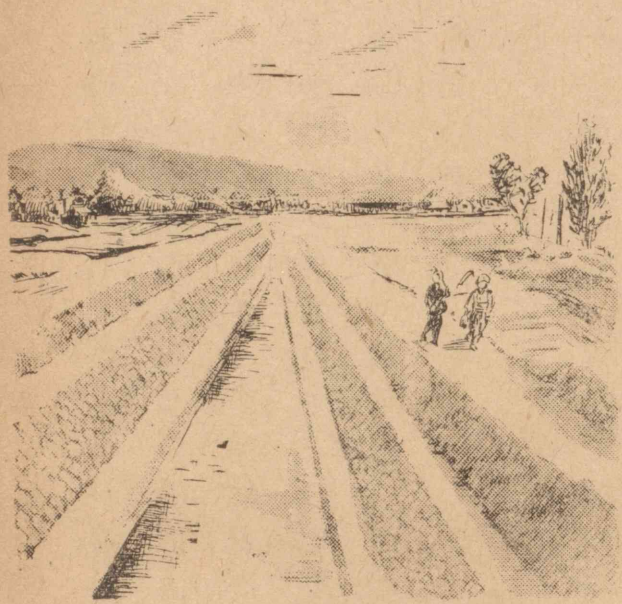
「そんな大きな工事をするには、村の人たちがみんなて、心をあわせることがたいせつですわね。」

と、いいました。

「そのとおりだね。工事に村中の人手がいるのは、もちろんだが、耕地整理をやる

となると、かえ地といって、自分のたんぼとひとのたんぼを、とりかえっこしなければならぬようなめんどろが、たいいてい、おこるのだ。そういうときに、よく、あらそいがはじまるので、村中でそうだんして、それこそ、心をあわせなければ、うまくいかないのだね。この村の耕地整理のときも、ずいぶんやつかいなことがあったそうだ。それでそのとき、村長をしていた大田のおじいさんが、自分かつてのことばかりかんがえている人に、よくいいきかせたり、県の役所と、なんども、うちあわせをしたり、いっしょうけんめい世話をし、て、やつと、この大工事をなしとげることができたのだよ。」

一郎くんは、にいさんの話を聞いて、記念碑のつくられたわけがよくわかりました。

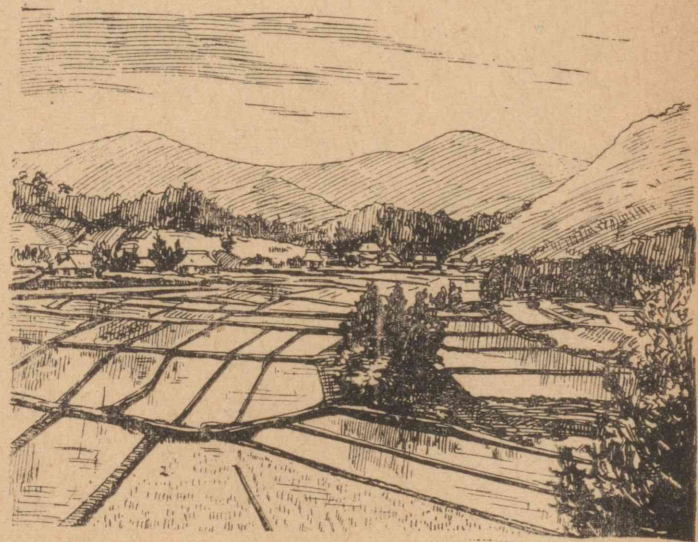


用水路

それから、にいさんは、遠くのたんぼをゆびさしました。「川むこうのたんぼを見てごらん。ここからだ、だんだんになつてきれいに見えるが、向こうの山の上から見ると、じつは、形がまちまちなのだよ。土地のけいしやがきゆうなので、耕地整理ができないわけだね。」
 「では、あんなたんぼは、どんなにして、水をひくのでしよう。」

○ たな田

山のふもとをながれる用水路に目をとめた、一郎くんは、「にいさん、あれが用水路ですね。あの水はどこからひいてあるのですか。」
 と、またたずねました。
 「あれは、吉田川を二キロも上流でせきとめて、いぜきをつくり、そこから水をひいているのだよ。この用水路の水は、この村のたんぼをうるおし、川しもの村で、もとの吉田川に、そそぐようにしてあるのだ。」

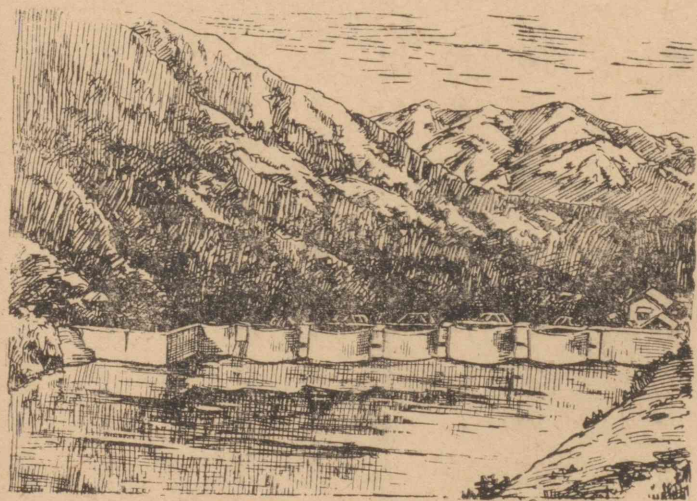


耕地整理でできた水田

と、かず子さんがききました。

「山の水をひいているのが多いようだね。けれども、それだけではたりなかったり、また山の水は、つめたくて稲によくなかつたりするので、ここでは山の上の方の谷間に、ため池をつくって、そこから水をひいているのだよ。」

かず子さんは、一郎くんにいさんの話を聞きながら、山向こうのたんぼを見ていましたが、「どうして、わざわざ、あんな



ため池

高いところまでたんぼをつくったのでしようね。」

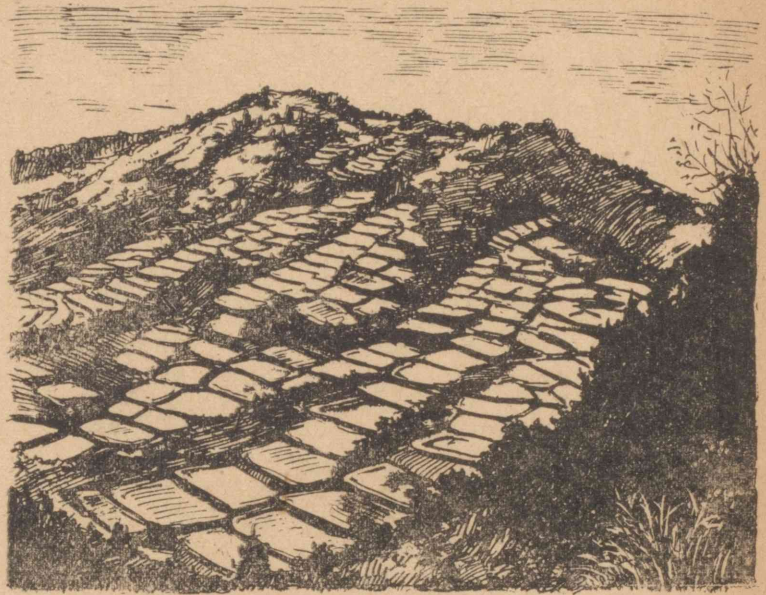
と、またききました。すると、一郎くんが、

「このへんの村は、平地が少なくて、米があまりとれないので、あんなところにまで、水田をつくったのだと、いつか、先生から聞きましたよ。」

と、いいました。

「そうだよ。ああいうたんぼは、たな田といってね。この村だけでなく、日本の山地では、どこにでも見られるものだよ。」
にいさんがこういうと、かず子さんは、つづいて、
「ではあなたな田は、いつごろ、つくられたのでしようね。」
と、たずねました。

「はつきりしたことはわからないね。でも、ずいぶん、むかし



だんだんになった水田

つくられたことはたしかだ。
この村の祖先の人たちが、
長い間かかって、一まい、一
まいと、水田をひらいてい
ったのだらう。
こうしてにいさんの話を聞
いているうちに、一郎くんた
ちは、村のたんぼをひらいた
人たちの苦心が、しだいにつ
よくむねにきざまれていくよ
うに思いました。

(二) あかりのうつりかわり

四人はおかをくだり、平野村に向かつて歩いていきました。
そのとき、

「さあ、これから大田のおじいさんを、たずねてみようじゃな
いか。」

と、にいさんがいいました。

「それはいいですね。これまで、お話をいちども聞いたことが
なかったから、きょうは、おじいさんにいろいろむかしのこ
とをお聞きしましょう。」

と、一郎くんも、さんせいしました。

大田のおじいさんのところは、一郎くんの家と、むかしから

したしくして、いまでも、しじゅういききしている間がらです。平野村にはいつて、大田さんの家をたずねると、きれいに白ひげのはえたおじいさんが、よろこんでみんなをむかえてくれました。にいさんが、いとこのかず子さんとまさおくんを、しゅうかいしました。

お茶をいただいたてから、一郎くんが、さつそく、

「おじいさん、きょうは、記念碑のあるおかにいつてきました。そして、にいさんから、この村のひらけてきたようすを、話してもらったのです。この村の耕地整理は、おじいさんが、村長のころ、おやりになったのだそりですね。」
と、たずねました。

「やあ、むかしの話だね。あときは、村の人たちの、はんた

いもあつたが、いまになつてみれば、よかつたわけだね。」

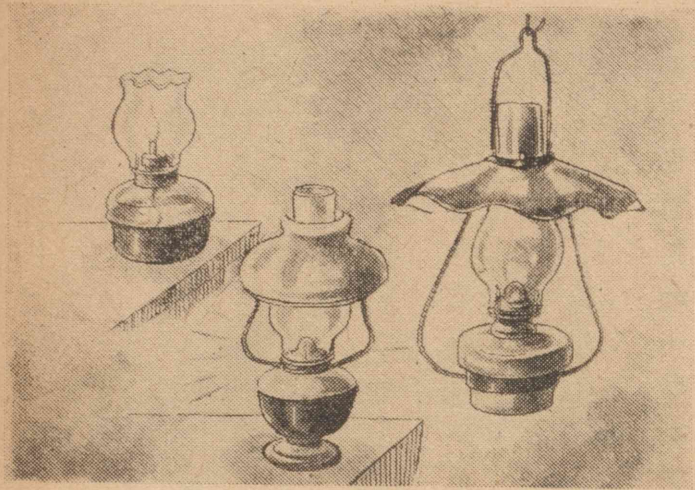
おじいさんは、こういつて、にこにこしました。そこへ、おばあさんが、おかしをもつて出てきました。

「ほんとうに、あのころは、たいへんでしたね。わたしまでずいぶんくろうをしましたよ。」

といつて、おじいさんと顔を見あわせ、いまでは、なつかしうに、そのころを思い出していられるようでした。それから、かわるがわる、耕地整理を、しとげた時代の村のありさまを、いろいろと話してくれました。

○ランプ

こういう話になると、二年生のまさおくんには、すこしむずかしいのか、じつとしていましたが、とつぜん、へやのすみの



ランプのいろいろ

「そうだよ。つぼのなかの石油が、しんにすいあげられて、もえつづけるようになっていなのだよ。その火を、もつとあかるくし、また、風できえないように、ガラスのほやが、かけてあるのだ。」

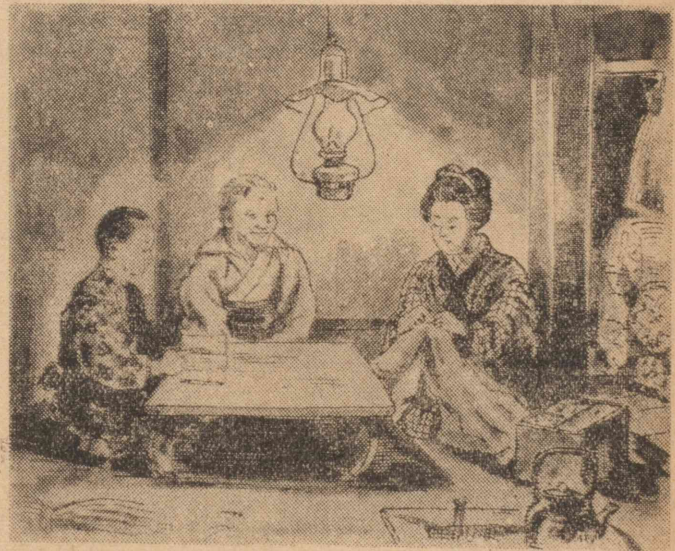
おじいさんが、こう話しているとき、おばあさんが、タンスの上からランプをとってきて、見せてくれました。このランプは、物おきにしまつてあつたのですが、このあいだ、てい電のときに、ふとおばあさんが思いついて、なん年

タンスの上をゆびさして、
「あれはなんですか。」
と聞いたので、みんなは、その方を見あげました。

「は、は、は、あれかね。あれはランプだよ。もう、こういう古い形のランプは、見ただけでは、なんだかわからないだろうね。」

と、おじいさんがいわれますと、
「こんどはかず子さんが、ランプには、石油を使つていたのでしよう。」

と、いいました。



ぶりがで使ってみたのだそうです。

一郎くんは、めずらしそうに、見ていましたが、

「うまくできていますね。でもランプは、電とうにくらべると、
ずっと、くらかったでしょう。」

と、いいました。

「ランプばかりのときには、そうも思わなかったが、電とうが
ついたときには、ひるのように、あかるくなったような気が
したものだね。」

と、おじいさんがいわれると、おばあさんも、

「そうでしたね。ランプのころは、夜は、こまかい仕事などで
きませんでしたね。それにくらべると、電とうがついて、ほ
んとうに便利になりましたね。」

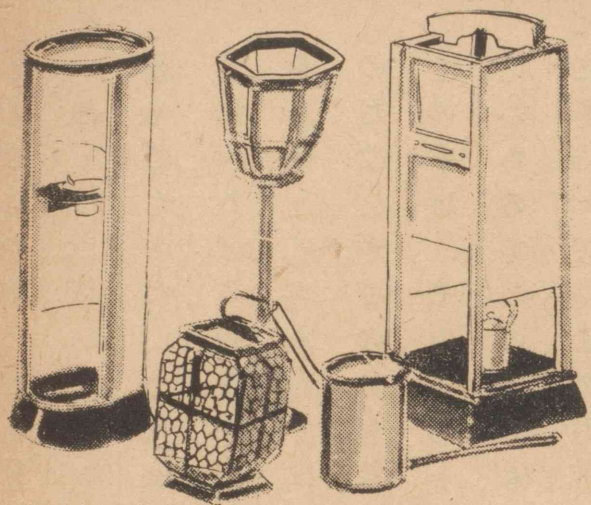
と、いいました。

一郎くんたちは、こんな話を聞いていると、おじいさんとお
ばあさんが、わかったころ、ランプの下でくらしていた夜の
ようすがうかんできました。

○ あんどん

「ところがね、おじいさんの小
さかったころは、そのランプ
さえもなく、あんどんとい
うものを使っていたのだよ。
おじいさんは、こういわれて
みんなを見ました。

すると、かず子さんが、

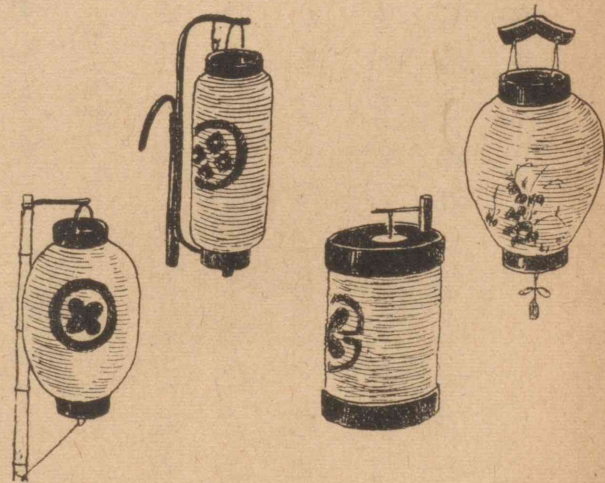


あんとんのいろいろ

「あんどんって、どんなものなの。
と、たずねました。

「あんどんかね。それは、うす紙
をはったはこのなかで、たね油
をもやして、あかりにしていた
のだよ。ここのとりの木村さ
んの家は、そのころ、油を売っ
ていたので、いまでも油屋さん
ともいつているのだ。わたしも、
小さいころ、よく油を買いにいつたものだよ。
そのとき、一郎くんが、

「そういえば、あんどんのあかりのもとで、
書物を読んでいる



ちようちんのいろいろ

むかしの人の絵がよくありますね。でも、あんどんは、ずい
ぶんくらかったでしようね。」
と、いいますと、おじいさんは、

「そうだよ。ランプよりもまだまだくらかったね。でも、日本
では、ずいぶん長い間このあんどんを使ってきたのだよ。
と、いいました。

「すると、おじいさんは、あんどん、ランプ、電とうと、三つ
のちがった夜のくらしを、知っていらっしやるわけですね。」
と、一郎くんのにいさんがいいました。

「いや、もう一つ、このごろでは夏になると、たんぼに、それ、
なんといつたかね、あおいあかりが——」。
おじいさんのこのことばをひきとつて、一郎くんが、

「ゆうがとうでしょう、おじいさん。」
と、いいました。

「そうそう、ゆうがとう。むしを集めるあかりだね。だが、あ
のあかりのことを、なんとかいうじゃないか。」
すると、にいさんが、

「けいこうとうとか、けいこうランプとかいっていますね。な
るほど、あれも電とうの一種だけれども、あれがそのうち、
家の中でも使われるようになれば、おじいさんは四つのあか
りの時代をごらんになるといえますね。」

と、かんしんしたようにいいました。

おじいさんも、すぎさった長い八十年のことを、つくづく、
ふりかえってみるようなかおつきで、ランプのほやをいじくり

ながら、また、しずかに話されるのでした。

「ほんとうに、すぎてみると、みじかいようだが、むかしとい
まどくらべると、たいへんなかわりかただね。あかりのうつ
りかわりなどもあるが、耕地整理をしたころのわたしなどを
かんがえると、古い家がらだというだけで、わけもなく村長
にさせられていたものさ。それがこのごろは、みんなも知っ
ているように、村中の人で、せんきよして村長をきめること
になった。なんでも、おかみのいうままにくらしていたころ
とは、すっかりかわってしまった。自分たちのくらしを自分
たちでよくしていくのが、これからの世の中というものだ。
きみたちには、その新しい世の中をつくっていくせきにんが
あるのだよ。しっかり、やってもらわなくてはならないね。」

八十のおとしよりとは思えないような、わかわかしい口ぶり
で、こう話されるのを聞いていると、一郎くんたちは、ほんと
に、しつかりしなければならぬという、気もちがわいてきま
した。

やがて、みじかい冬の日のことを思つて、一郎くんたちは、
おじいさんの家をおいとまして、日のくれないうちに、また山
をこえて、朝日市に帰りました。

(三) むかしのくらしといまのくらし

平野村で大田のおじいさんの話を聞いてから、一郎くんは、
いよいよ、むかしのくらしといまのくらしのちがいをかんがえ
させられました。むかしとくらべて、いまのわたしたちは、い
つたい、どんなくらしをするようになっているのでしよう。そ
の問題について、一郎くんは、学校で、みんなと話しあつたり、
先生やおとうさんや、にいさんに聞いてみたりしました。そう
してまなんだことから、こんなことがらをまとめました。

○きものとすまい

大田のおじいさんに聞いた、あかりのうつりかわりを思った
だけでも、わたしたちは、むかしの人のゆめにも、かんがえな

かつた便利なくらしをしているわけです。それは、わたしたちのきものや、すまいについてもいえます。

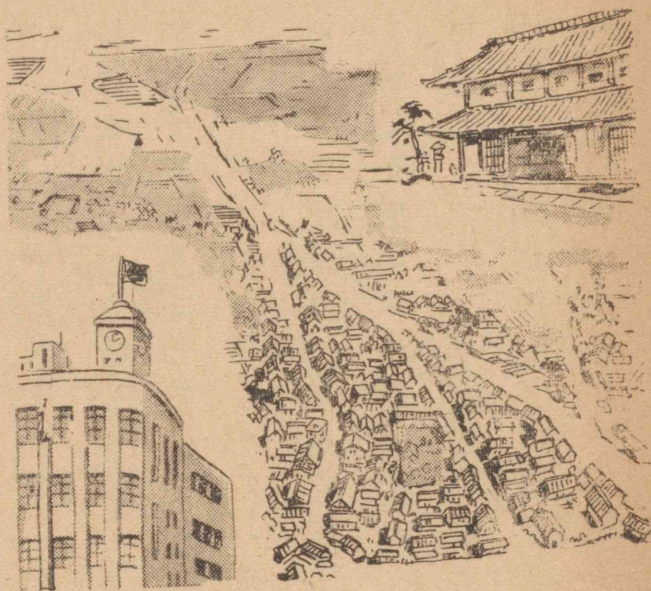


きものうつりかわり

きぬ、あさ、もめんのきもの
しかなかった、むかしとちがっ
て、このごろは毛おりもの・じ
んけん・スフ・ナイロンなど、
いろいろなしゆるいのぬのがふ
えてきました。そして、きもの
の形から見ても、このごろでは
洋服がおもになって、男女とも
に、かっぱつに、はたらきよい
ものがきられるようになってい

ます。また、はきものでは、ゴムぐつ・ズック・じかたび・かわぐつなど、これも、やはり、かつどうししやすいものが、はけるようになりました。

すまいをかんがえると、かんたんな、わら屋・板屋に住んでいたむかしにひきかえ、いまでは、かわらぶきのしっかりした家が多くなりました。そのたてかたにも、西洋風のさまざまなかふうがとり入れられています。それに明治時代にガラスが使われるようになってから紙しようじだけだった、それまでにくらべて、家の中が、ずっと、あかるくなつたこともわすれてはならないでしょう。むかしも、城やお宮やお寺のようなくべつのため物には、ずいぶんりっぱなものがありました。しかし、このごろのコンクリートだてのアパートのように、たくさん



人が住める大きなたてものは、もちろんありませんでした。それに、いまの鉄きんコンクリートのたて物などになると、火事や地しんのしんぱいから、わたしたちをまもってくれます。

○ 助けあいの生活

こうして、いろいろの新しいものが作られるようになったのはもちろん、明治時代からのことです。明治にはいって、日本は外国から、すぐれた機械を、どしどしとり入れました。

電とうでも、かわぐつでも、コンクリートのたて物でも、す

べて、機械の力を利用してつくり出されるものです。わたしたちは、まず、新しい機械のおかげで、むかしとは見ちがえるほど、便利なくらしができるようになったことを思うと、そういう機械をくふうした、たくさんの人々の苦心を、かえりみずにはいられません。それから、先生が、科学やぎじゆつが進歩するためには、だれでも自由に、べんきょうができるということが、ひつようだとおっしゃったこともわすれられません。けれどもわたしたちのくらしは、ただ、便利になっただけではありません。めいめいのくらしかたが、むかしとたいへんかわってきていることに、ちゆういしまししょう。たとえば、大きな工場で、どんどん、きものがつくり出される今日では、むかしの農家でやっていたように、人々が自分のきものを自分の家

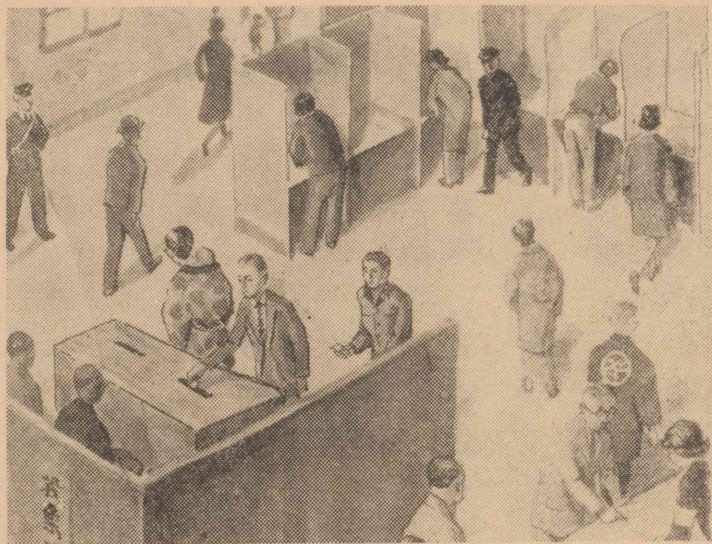
でおるひつようはなくなりまして。農家の人々は、店からすきなものを買ってくればいいわけで、自分たちは畑仕事だけにはげむこともできるようになったのです。そして農家でたくさんつくられるこくもつややさいは、ぎやくに、きものをつくっている工場の人々などが、買って食べているのです。

こんなふうには、このごろのひらけた世の中では、人々が、それぞれ自分の仕事にはげんで、おたがいに助けあうようになっていきます。こうした、めいめいのくらしのかわりかたをかんがえると、人々はむかしよりも、しだいに、仕事の手わけをするようになってきたことがわかります。とくに、機械の力を利用するようになってからは、一つのものをつくるにも、仕事をいくつにもわけてやります。こうして、おたがいが自分のとくい

の仕事を受けもって、助けあいのくらしをしてきたからこそ、世の中がひらけてきたともいえるでしょう。

ひろくおたがいが助けあうためには、ものをつくる人々のとりよくばかりでなく、それを遠くへはこぶ仕事や、人々の手にはいりやすいように、しなものを売り買いする店の仕事も、またたいせつです。まえにべんきようした市のいちはったつや商人の力、また交通・通信のはったつを思い出しましょう。おかねを使うようになったことも、のり物や通信のべんりになったことも、みんな世の中の助けあいになくはならないくふうでした。何でもほしいものとかえることのできるおかねがなかったり、むかしの旅のような苦しさがつづいていたとしたら、人々はおたがいに助けあいたくても助けあうわけにはいかないでしょう。

おたがいに仕事をわけあっているこのごろでは、みんなが力をあわせてくらしをよくするいろいろのしくみも進んできています。農村・漁村のきょうどう組合、工場、会社、役所に、はたらく人々のろうどう組合などは、ちやうど、大田のおじいさんのことばのように『自分たちのくらしを自分たちでよくしていく』ための新しいしくみなのです。そういうしくみによって、人々はなかまのくらしを助けあい、遊びやスポーツなどでも、いっしょに、たのしめるようになってきました。また、おなじ町や村に住んでいる人々にしても、やはり、みんなてべんきょうしたりたのしんだり、力をあわせて病氣やきけんをふせいだりすることにつとめています。そのために、町々に学校・図書館・公園・げき場・病院・警察・公民館などのせつびがだんだん



せんきよ場

ん、とどのつてきています。大田のおじいさんは、わかいつきから村のことに、いろいろつくしていたけれども、四十年前に村長になったのは、おもに古い家がらの人だというりゆうからであったようです。しかし、いまでは、国会議員をはじめ、県・市・町・村の議員・市長・町長・村長やきょういくのこと

を、よくかんがえてもらうきょういくいんなど、すべて、それぞれの土地の人々が、せんきよできめることになりました。

国の政治をとるそうり大臣でも、国会議員のせんきよできまるのですから、やはり、日本国中の人々が、みんな自分のかんがえて、えらんでいるわけです。こういう新しい政治のしくみになつて、人々は、みんな、えらんだ人に政治をやってもらい、たえず、その人々のやっていることを、みまもりながら、自分の仕事に、はげむことができるわけです。

新しい世の中は、こういう助けあいのしくみの中で、わたくしたちがめいめいのつとめを、はたしていくことによつて、ますます、進歩していくにちがいありません。

助けあいということは、もちろん、むかしからあったことです。人々がおたがいに助けあわなければ、水田ひとつひらくことはできなかつたはずです。むかしの農家が、しぜんにと手をと

りあつて、仕事をしていたことは、いくらもかぞえられます。

しかし、むかしの人々は、ちやうど通信が不便で、はなれた土地のようすは知らずにくらしていたように、せまい自分たちの住む近くだけで助けあつていたといつていいのです。ところが、いまのわたくしたちのくらしは、日本国中の助けあいであり、さらに、世界の人々との助けあいということがよくわかりました。

学習のてびき

一 みなさんの郷土では、田地整理のできた水田・用水路・ため池・だんだんになつた水田などのうち、どれが見られますか。それを見にいって、どんなになつているか、しらべてご

(テ)	(チ)	(タ)	(ト)	(セ)
手紙 鉄きんコンクリート デパート 寺子屋 てんらん会 電話	町長 中国 知事	助けあいの生活 たな田	大工町 大名 大工	関所 石油 せり売り せんきよ
95 29 7 111 108 101	149 63 149	125 144	14 150 16	87 132 48 149
(ハ)	(ノ)	(ナ)	(ト)	
波止 二十日市 はたかり 箱根	農家 農地 のりつき場	七日市 長野県 中仙道 奈良の都	東海道 銅でつくったおかね 図書館 富山の商人	電ぼう 十日市
24 55 68 85	37 17 81	59 34 54 49	67 149 63 80	101 54
(ム)	(ミ)	(マ)	(ホ)	(ヒ)
武士 むかしの市 むかしのかへい	みぶり 港 道しるべ	まつなみ木の道 町びきやく	防波堤 紡績工場	早うま ひきやく ひきやく ひきやく 病院 ひらがな
15 62 53	102 24 80	75 99	8 9	97 68 97 99 9 107
(ワ)	(ロ)	(ラ)	(ヨ)	(エ)
	わたし船 わらじばき	ろうどう組合	四日市 用水路 八日市	ゆうがとう ゆうびん ゆうびん局
	78 85	148	54 124 54	8 100 138
				(モ)
				模 文 門前市 字
				23 103 60

先生がたへ

第四学年用社会科教科書として、「むかしのくらしいまのくらし」を執筆しました。本書は、とくに、次の諸点を考慮して編集してあります。

一、第四学年ごろの児童は、その経験の範囲がようやく郷土の外にひろがり、それを中心として、くらしの今昔などについて理解しようとする欲求と興味を強くもつてくると思われれます。

この欲求と興味とをみたし、その生活を拡充させることが、また社会教育の要求するところでもあります。

二、このような見地から、児童の生活の現実にあつて、とくに理解の容易な、一般的と思われる郷土に取材して、生活の今昔を比較考察させることにしました。

三、その範囲は、まず、自分のすむ町から出発して村に及び、それぞれの社会を、衣・食・住・農業・商業・工業・交通・通信などに取材して、それらの歴史的推移と相互関係を明きらかにすることにしました。

もちろん、児童の環境によっては、これ以外のものについても、関心の強いものがありましよう。この場合には、各教師において、地方の实情にに応じ、児童の能力・欲求に即して、本書の意図するところに従つて取扱うことが、のぞましいのであります。

四、本書は、また、中心人物の一人ならびに、その友だちを活動させ、学習の具体的展開をはかることによつて、自然に学習方法を会得させるとともに、民主的近代生活の仕方を体得させることにつとめました。

五、文章は、平易をむねとし、新かなづかいと教育漢字とを用いました。特別の用語には、ふりがなをつけて、読みを容易にしました。

六、児童の興味をますとともに、その理解を深めるため、写真や絵などを多くとり入れました。もちろん、これだけでじゅうぶんだとはいえません。それぞれの実情に応じて、工夫していただきたいと思ひます。

七、本書は、問題の扱い方、問題の理解の仕方を示すことに主眼をおきました。従つて足りないところは適当に指導説明し、また児童の学習の課題として与えることが望ましいのであります。もちろん、その際の扱い方はじゅうぶんに、児童の個人差を考慮してなすべきことはいうまでもありません。各章末の「学習のてびき」の扱い方また然りであります。

Copyright 1950, by
The Gakkō Toshō Kenkyūkai

All rights reserved

The text of this publication or any part thereof
may not be reproduced in any manner whatsoever
without permission in writing from the authors.

小社 404

社会科 第四学年用
むかしのくらしいまのくらし

Approved by Ministry of Education
(Date 1950)

編者

広島市東千田町
広島高等師範学校附属小学校
岡部充

表紙・さしえ
武藤弘之

昭和二十五年 月 日印刷
昭和二十五年 月 日発行
定価 円

著者
財団法人 広島市東千田町 広島高等師範学校附属小学校内
岡部充 校長 森岡文策

発行者
東京都港区芝三田豊岡町八番地
学校図書株式会社
代表者 川口芳太郎

印刷者
東京都港区芝三田豊岡町八番地
印刷株式会社
代表者 川口芳太郎

発行所
東京都港区芝三田豊岡町八番地
学校図書株式会社

本書の指導書・ワークブック・註釈書並びに
これに類する一切のものの無断発行を禁ずる

広島大学図書

広島大学図書

0130449976



文庫

50

976